

2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成18年度調査発掘報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、京都第二外環状道路敷設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局の依頼によって長岡京市下海印寺で実施した。第二外環状道路は大山崎ジャンクションと京都縦貫道大枝インターチェンジ(仮称)をつなぐ道路で、長岡京市南部を東西に流れる小泉川にそって山間部に至るルートをとる。このルートは長岡京跡南部に当たる地域を横切る。10年間しか存在しなかった長岡京において、条坊が対象地に施工されていたかは、造都の進捗状況を知る上で大きな問題とされる。また、同時に調査地は友岡遺跡・伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡^(注1)などの長岡京期以外の時期の遺跡の範囲にも含まれている。

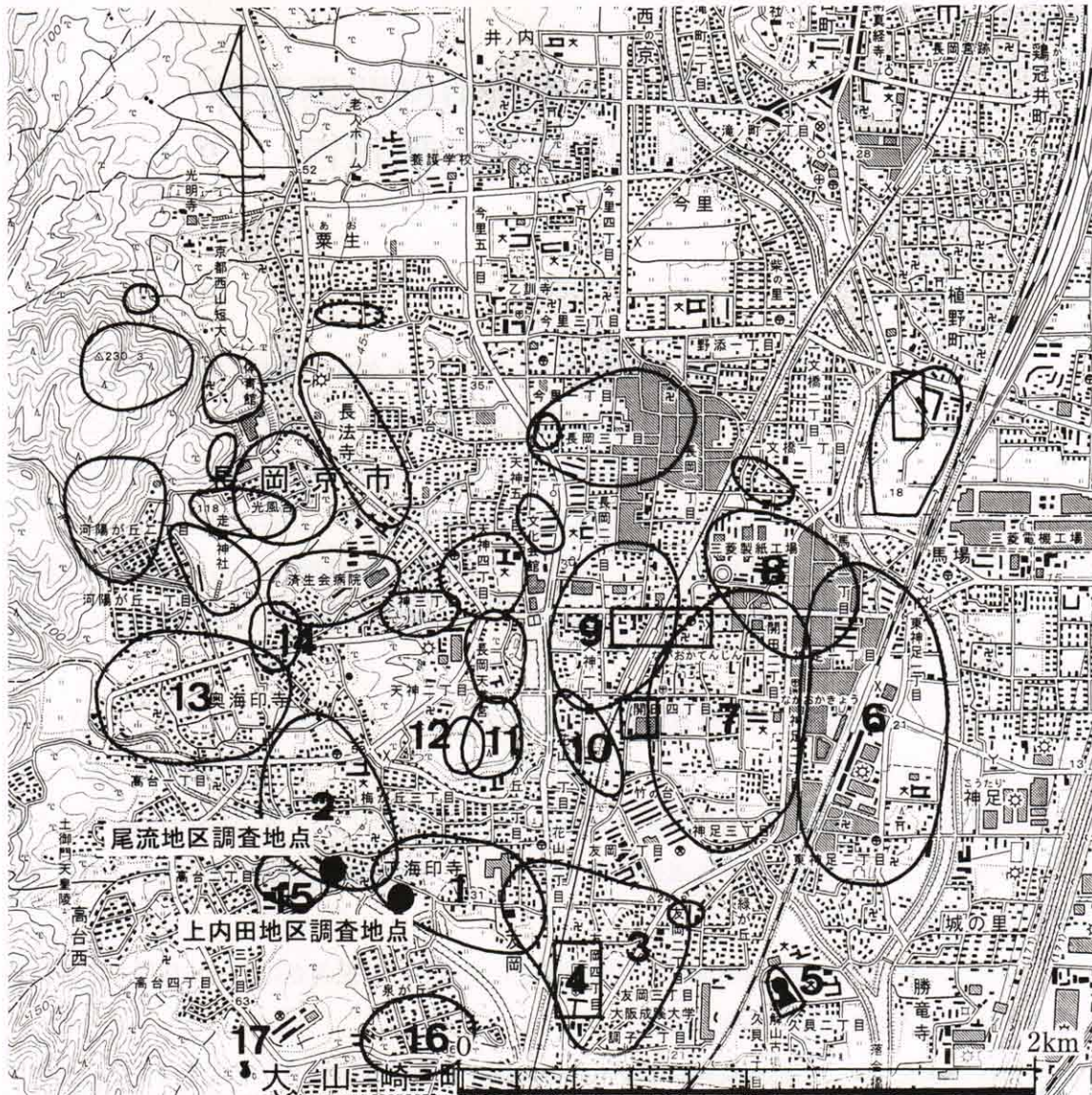
小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが、かつては大きく蛇行しながら下海印寺地区を流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も指摘できた。発掘調査の必要な個所を特定することを目的に、平成15年から試掘調査を先行して、調査可能な地域から順次試掘調査を行うと共に、面的な調査が必要な地区には本格的な発掘調査を実施して^(注2)きた。

今回報告する尾流地区・上内田地区は平成16年度に実施した試掘調査によって面的な調査が必要な場所として認識された調査区である。

尾流地区の調査区は、京都府長岡京市下海印寺尾流に所在する。長岡京条坊では右京七条四坊十四町、西京極大路(旧条坊では右京七条四坊十六町^(注3))にあたり、縄文時代後期の遺跡として有名な下海印寺遺跡^(注4)の範囲にも含まれる。また、長岡京西南の祭祀遺構と位置づけられる西山田遺跡^(注5)にも近接した場所で、長岡京の条坊が施工されていたか注目される地域でもある。平成16年度の試掘調査(長岡京跡右京842次7AN00R-2地区・下海印寺遺跡第21次)において1～4の4つのトレンチを設定し遺構の存在が確認できた。

平成17年度には試掘調査を受けそれぞれの調査区を拡張し調査(長岡京跡右京第862次調査・下海印寺遺跡第24次・西山田遺跡)を行った結果、さらに現在の小泉川よりに包含層が延びることから、平成18年度は2トレンチ・4トレンチの南側に2か所に分けて調査区を設定した。平成16・17年度調査では、土坑や柱穴・溝などの遺構とともに縄文時代から中世にいたる各時期の遺物が出土した。18年度調査においては後述するように、弥生時代の溝や各時期の自然流路や護岸工事の跡などが検出できた。長岡京期の遺構として明確なものは検出することができなかった。

平成18年度調査は長岡京跡右京第870次調査(7ANM00-5地区)として実施した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、主任調査員戸原和人・増田孝彦、専門調査員竹



第1図 調査地位置図及び周辺主要遺跡(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

1. 伊賀寺遺跡 2. 下海印寺遺跡 3. 友岡遺跡 4. 鞆岡廃寺 5. 恵解山古墳 6. 神足遺跡
7. 開田遺跡 8. 開田古墳群 9. 開田城ノ内遺跡 10. 十三遺跡 11. 天神山遺跡 12. 天神山古墳群
13. 奥海印寺遺跡 14. 谷田遺跡 15. 西山田遺跡 16. 脇山遺跡 17. 鳥居前古墳

井治雄が担当した。現地調査は平成18年4月20日～平成18年9月8日までの期間を要した。調査面積は970㎡である。

上内田地区の調査区は京都府長岡京市下海印寺上内田に所在する。長岡京条坊では右京七条四坊五・十二町、西四坊坊間小路(旧条坊では長岡京跡右京七条四坊七・十町、西四坊坊間小路)にあたり、縄文時代から近世の複合遺跡である伊賀寺遺跡の範囲に含まれる。長岡京期の遺構が検出された西山田遺跡よりも南に位置することから、長岡京条坊の施工の有無も調査課題として挙げられた。

今回の調査対象地内には平成16年度(長岡京跡右京第841次7ANOKD-2)に4か所の試掘トレンチを設け、竪穴式住居跡・土坑・遺物を含む流路などが検出できた。この試掘結果を受けて今回の調査区が設けられた。調査区は、現有の里道があるため、2か所にわけて設定した。

今回報告の上内田地区平成18年度調査は、長岡京跡右京第890次(7ANOKD-3)として実施した。現地調査は当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、主任調査員中川和哉、専門調査員竹井治雄が担当した。現地調査は、平成18年9月11日～平成18年2月27日までの期間を要した。調査面積1300㎡である。

本調査概要は、現地調査を担当した戸原と中川が執筆し、文末に文責を記した。現地調査においては周辺住民および諸機関の協力を得たことと、調査及び整理作業に参加していただいた多くの方々に対して深くお礼申しあげたい。

なお、今回の調査に係る経費については国土交通省近畿地方整備局が負担した。

2. 歴史的環境

今回調査した尾流地区、上内田地区は京都盆地を形成する西山を源に発する小泉川の左岸に位置する。小泉川流域には段丘が発達しており、旧石器時代から人々の生活が営まれてきた。特に関西地方では遺跡数の少ない縄文時代の遺跡が点在している。友岡遺跡では右京第325次調査時に縄文時代中期の船元式土器が出土した。また、当該事業関連の試掘調査においても縄文時代後期の縁帯紋土器がまとまって出土している。尾流地区調査地の約400mに縄文時代後期の遺跡と知られている下海印寺遺跡1976年度調査地が所在している。小泉川下流においては、下植野南遺跡(註6)から縄文時代晩期の甕棺墓が検出されている。上内田地区の調査においても縄文晩期の土器が出土しており、小泉川周辺で縄文時代の集落が綿々と営まれていたことがわかる。

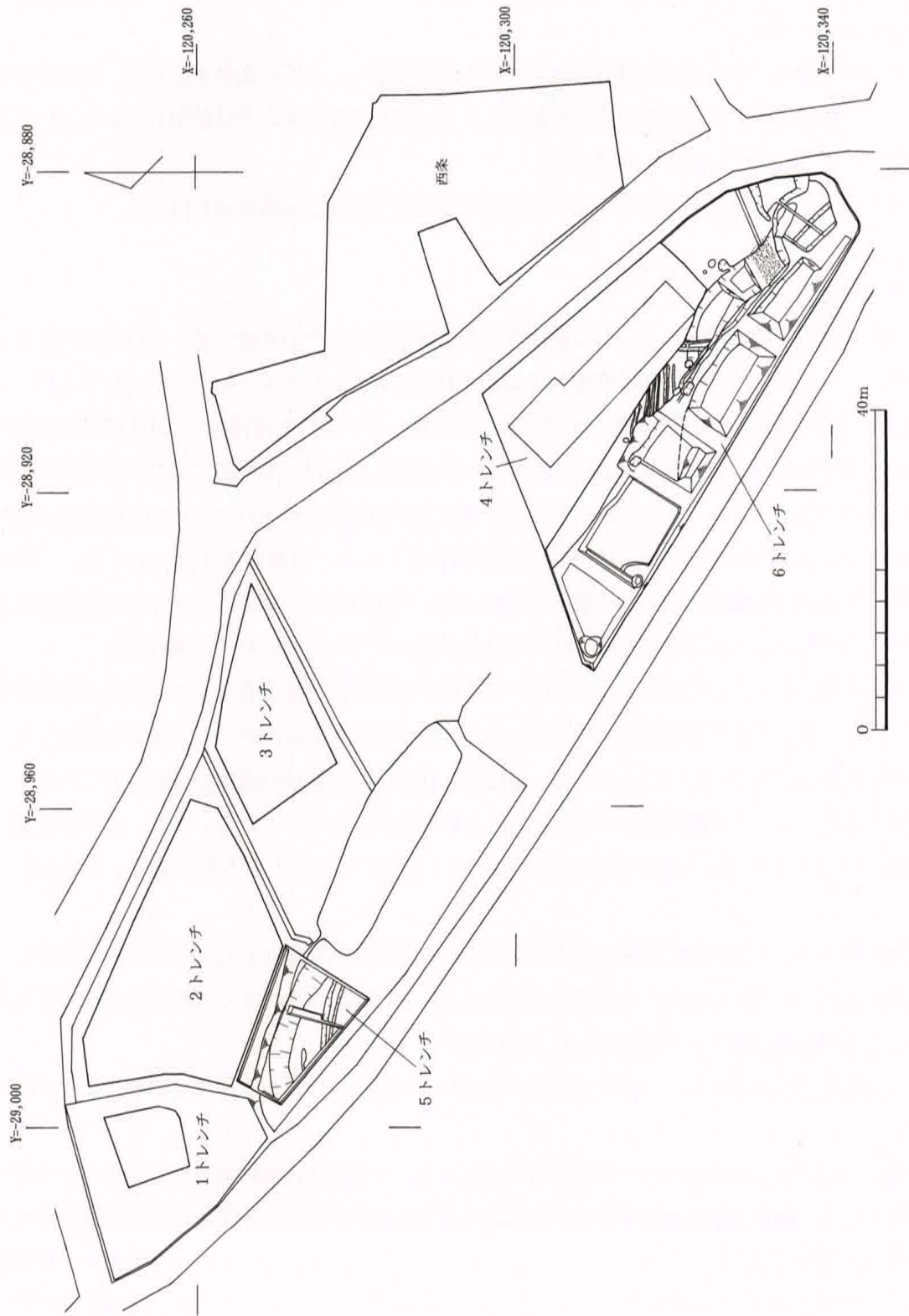
弥生時代の遺跡としては顕著なものに、下流域の下植野南遺跡(註7)がある。この遺跡は弥生時代中期に属し、数多くの方形周溝墓が検出された。中には磨製石剣を埋納した主体部も存在した。下海印寺遺跡内に含まれる尾流地区においては弥生時代後期の遺構や遺物が発見されている。

古墳時代には、下植野南遺跡(註8)で家形埴輪をもつ方墳が発見されている。また、乙訓郡最大の前方後円墳である恵解山古墳や鳥居前古墳、境野1号墳といった大形古墳も隣接して造られている。

白鳳期には、鞍岡廃寺が造営され小泉川周辺に有力な氏族が存在したことをうかがわせる。発見された瓦の中には、飛鳥時代に遡るものもあり、寺歴がさらに古くなる可能性が指摘できるが、中心伽藍が発掘調査により確認されたことはない。

奈良時代では小泉川右岸の鈴谷窯跡で、須恵器の生産が行われた。詳細な窯本体の位置は不明である。

長岡京期には小泉川両岸は、京域の南部にあたり、尾流地区は西の端である。また、山が南側に迫るため、実際に条坊が施工された最南端である可能性が高い。今回の尾流地区調査地の南側の西山田遺跡では流路の中からおびただしい数の墨書人面土器や土馬が出土しており、長岡京域西南隅における国家的な祭祀行為の結果と位置づけられている。また、長岡京は10年間の都で、条坊が計画案どおり京の隅々まで施工されていたかは不明であり、南部地域の長岡京期の遺構の有無は、長岡京造営の進捗状況を知る上に重要な視点となる。



第2図 尾流地区トレンチ配置図及び周辺調査区

平安時代に入ると長岡京の土地は分割され農地として細分されて、急速に農地化が進む。そのため、都市が継続した平安京に比べて、後世の攪乱行為を受けていないことから長岡京期の遺構は比較的良く残されている。都が平安京に移ると、平安京地内にあった山城国府は長岡京の南に遷された。その有力な候補地が小泉川左岸の南栗ヶ塚遺跡である。この遺跡からは大形の建物や、瓦などが発見されている。また、下海印寺遺跡の名前の由来である海印寺も小泉川左岸に作られた。寺の詳細は不明であるが、天皇の行幸を受ける記載があり、荘厳な伽藍が広がっていたものと想定できる。現在も塔頭の1つとされる寂照院がある。同寺仁王像の胎内からは御成敗式目が発見されている。

調査地にあたる、伊賀寺遺跡もその名が示すように寺の存在が想定できる。上内田地区の調査では、出土した瓦が長岡京期のものでないとなればこの寺と関連するかもしれない。小泉川に関して歴史上脚光を浴びるのは、羽柴秀吉と明智光秀の戦いとして知られる山崎合戦のとき、この川を挟み両陣営が対峙した。

近年までこの地域は小泉川両脇の平坦部に水田、微高地上には集落、丘陵裾部は竹やぶと言う景観が広がっていたが、丘陵部の大規模開発によって新しい町が部分的に広がっている。

(中川和哉)

(1)長岡京跡右京第870次(7AN00R-5地区)・下海印寺遺跡

調査地は、小泉川左岸の菩提寺川との合流点近くに所在する。長岡京市奥海印寺尾流13-1ほかにあたり、長岡京跡の条坊復原によると、右京七条四坊および西四坊大路が想定される。また縄文時代から中世にいたる集落遺跡として知られている下海印寺遺跡の範囲にも含まれている。

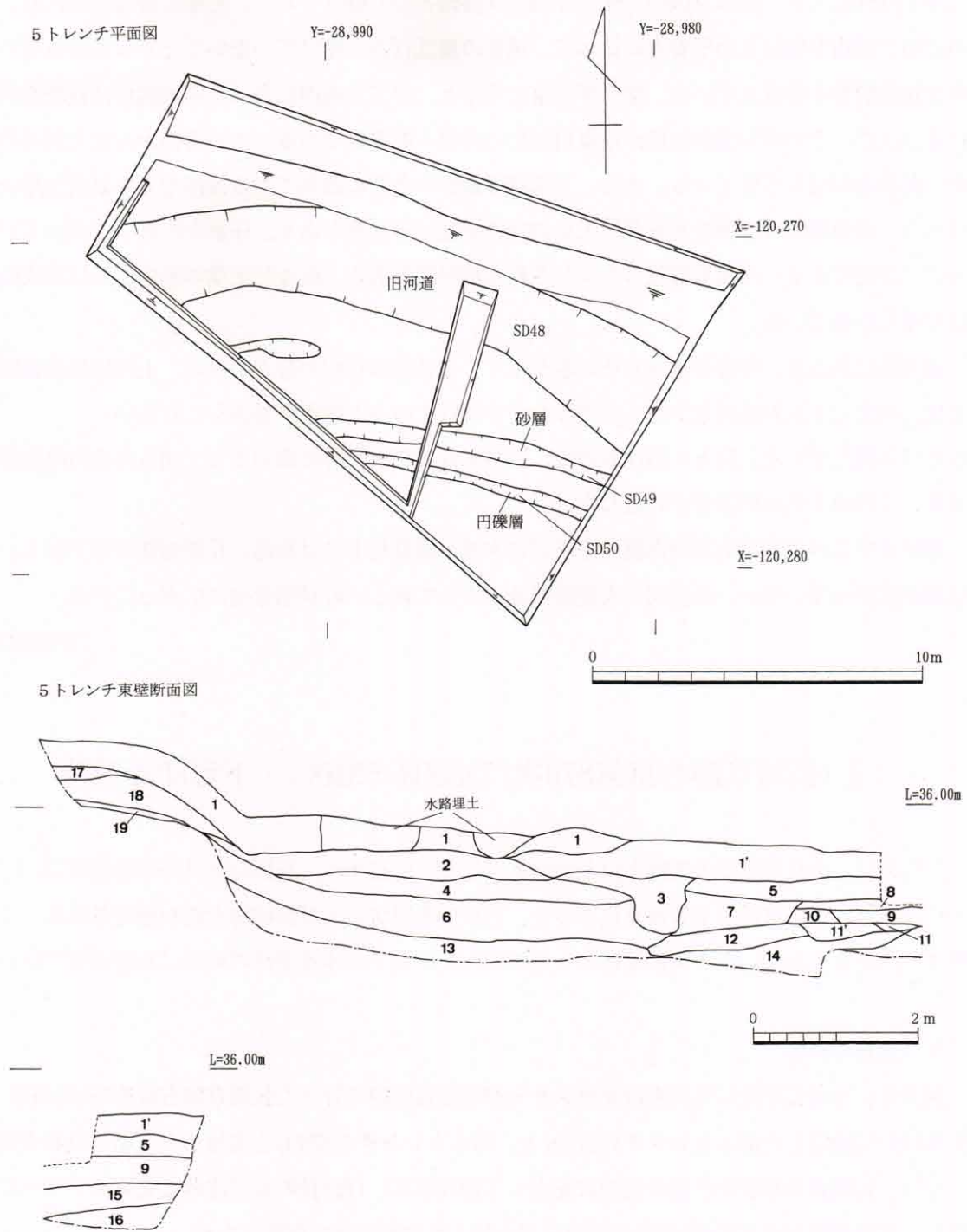
1. 調査の概要

調査は、平成15年度に当調査研究センターが尾流地区内で行った長岡京跡右京第781次調査に引き続いて設定した第5トレンチの140m²と、第6トレンチの830m²を実施した。周辺の調査例としては、長岡京市第四中学校の建設に先立って1982年に、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した長岡京跡右京第104次調査地が小泉川を挟んで本調査地の南西にある。

今回の調査の結果、中世以降と考えられる石組みの井戸跡、中世の水田跡・旧小泉川の護岸工事跡・旧河道跡や、平安時代以降の礫敷き遺構・溝跡、弥生時代から古墳時代にかけての溝跡などを検出した。

A. 第5トレンチ

第5トレンチを設定した位置は、調査着手段階には、北半部と南半部で二段になる水田地形を呈していた。調査の結果、上位となる北半部では、平安時代の緑釉陶器や土師器、須恵器などが



1. 1' . 耕作土 1. 畑土 1' . 水田土 2. 暗灰褐色粘質土 3. 赤褐色～灰褐色砂礫 (2～10cm)
4. 灰色粘性砂質土 5. 黄褐色粘質土 6. 暗灰色粘質土 7. 褐色～灰褐色粘性砂質土
8. 黄褐色粘質砂礫混じり (1～2cm) 9. 黄褐色砂質土 10. 灰～褐色粘性砂質土
11. 赤褐色～褐色砂礫 (1～5cm) 12. 灰色砂礫 (0.5～5cm) 13. 灰色砂礫 (0.5～1cm)
14. 灰色砂層 15. 灰色～褐色砂礫 (ラミナー) 16. 赤褐色砂礫ラミナー (2～10cm)
17. 黄褐色粘質土 18. 黒灰色粘質土 19. 黒色粘質土礫混 (6～30cm)

第3図 尾流第5トレンチ検出遺構平面図・東壁断面図

出土したが、明確な遺構は検出していない。一方、下段となる南半部では、3条の溝などを検出した。

溝S D48(第3図・図版第1) 幅2.5~3.0mで、長さ17mにわたって検出した。溝内からは灰釉陶器皿・壺、瓦器椀や土師器皿などが出土している。

溝S D49(第3図・図版第1) 溝S D48の南で平行する幅0.8mの溝で、長さ8.2mにわたって検出した。溝内からは土師器片が出土した。

溝S D50(第3図・図版第1) 溝S D49の0.2~0.4m南で平行する幅0.4mの溝で、7.6mにわたって検出した。拳大から人頭大の礫が入っており、水田の畦畔や土手を築造した際の掘り込み地形の可能性がある。出土遺物はなく時期は不明である。

B. 第6トレンチ

第6トレンチを設定した位置は、調査着手段階には、北半部と南半部で二段になる水田地形を呈していた。調査の結果、上位となる北半部では、礫敷き遺構S X51、護岸施設S X55、溝S D25、東西・南北の溝、土坑などを検出した。下段となる南半部では、井戸跡S E54、旧河道NR56-A・NR56-Bなどを検出した。

溝S D25(第4図・図版第2) 平成17年度の調査でその一部を検出していた溝で、今回の調査では幅約5mを測り、約20m遺存していることが判明した。埋土の上面からは古墳時代の移動式竈や、土師器高杯・須恵器杯などが出土している。

土坑S X61(第4図) 調査地北半の中央付近で検出した。直径約0.8m、深さ約0.4mを測る。土坑内より土師器甕が1個体出土した。

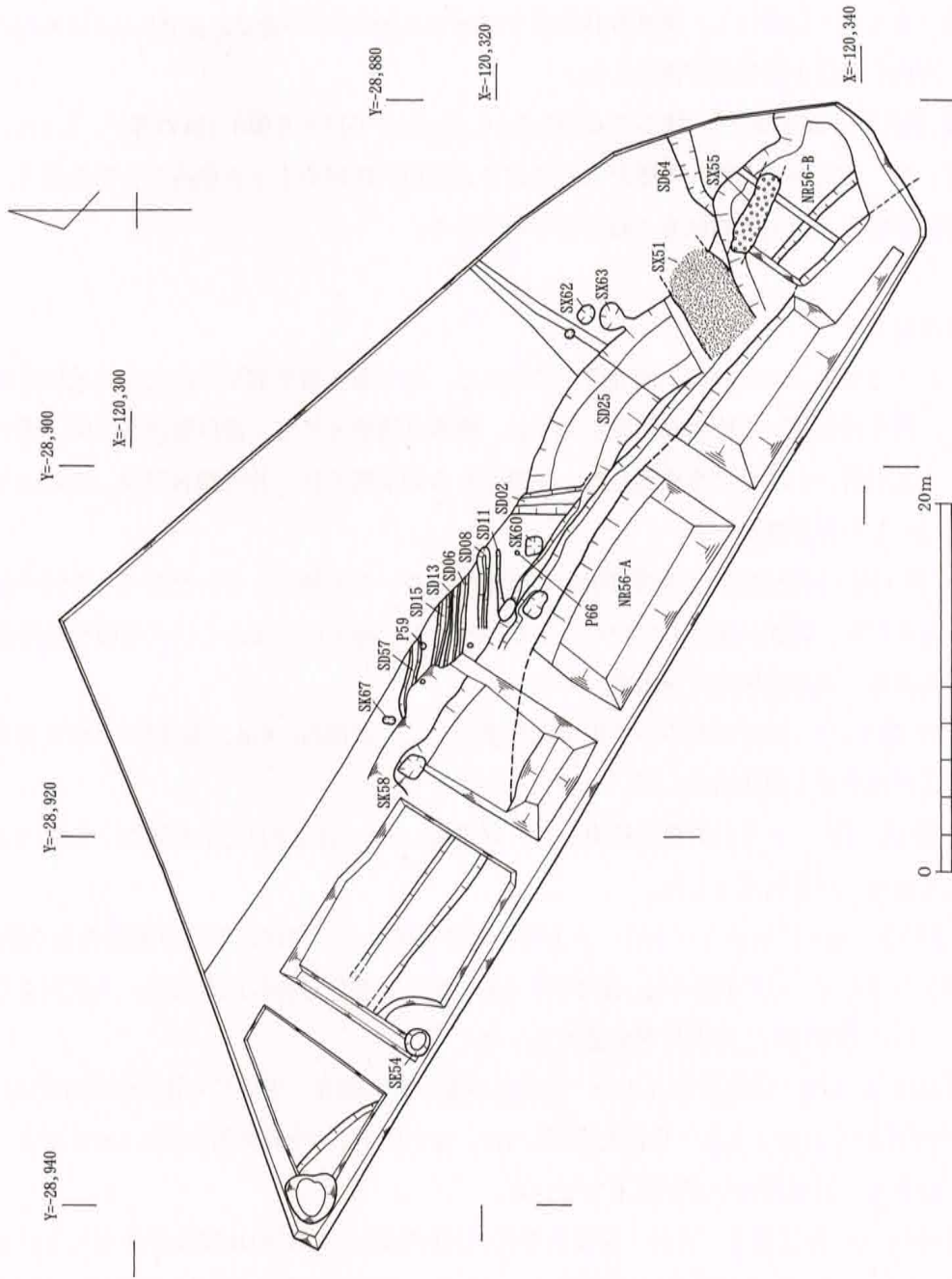
土坑S X62(第4図) S X61の東で検出した。直径約1.2m、深さ約0.3mを測る。土坑内より古墳時代の土師器片が多数出土した。

土坑S X63(第4図・図版第3-(1)) S X62の南で検出した。平成16年度の試掘調査で礫敷き遺構としたものである。直径約1.4m、深さ約0.3mを測り、溝S D25に注ぎ込む。土坑内より多数の礫とともに古墳時代の土師器片が少量出土した。

南北溝S D02(第4図・図版第3-(2)) 平成16年度の試掘調査、平成17年度の長岡京跡右京第781次調査で検出した溝である。検出した幅1.4m、深さ0.3m、今回の検出長3.6mを測る。溝内からは土師器皿、須恵器杯などが出土している。

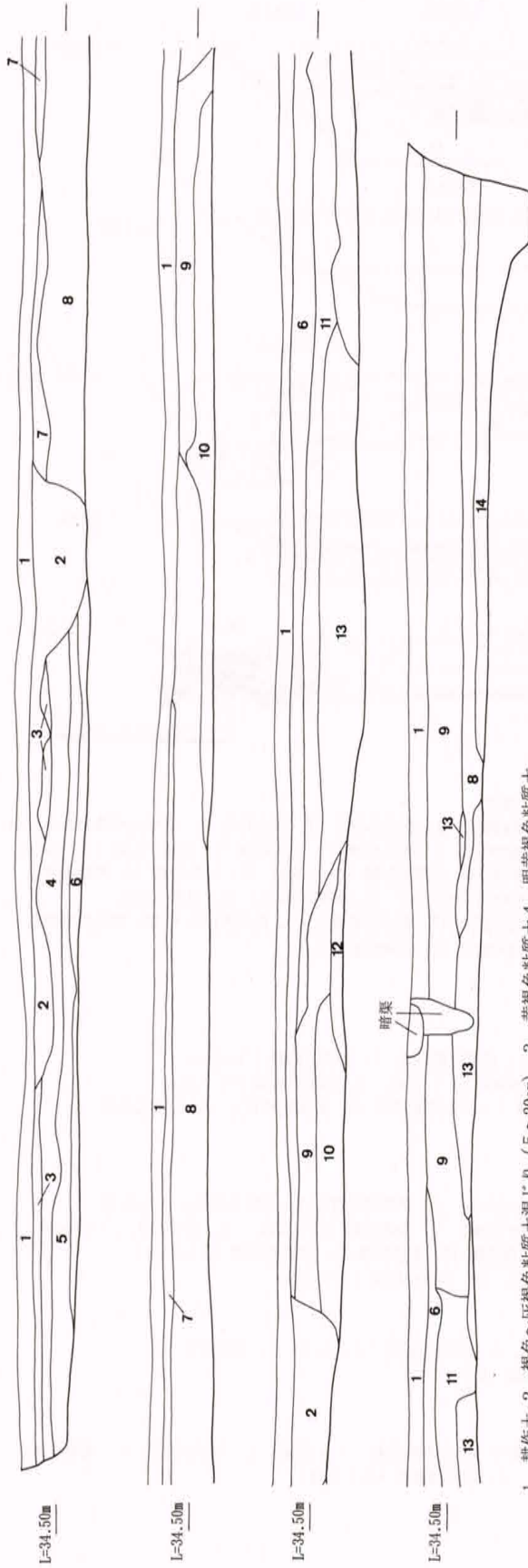
東西溝群(第4図・図版第3-(3)) 平成17年度の長岡京跡右京第781次調査で検出した溝群である。溝S D06は、検出した幅0.6m、深さ0.1m、今回の検出長4.0mを測る。溝内からは土師器皿、須恵器杯などが出土している。溝S D15は、検出した幅0.8m、深さ0.1m、今回の検出長3.8mを測る。溝内からは土師器皿、瓦器椀などが出土している。

礫敷き遺構S X51(第4・8・9図・図版第4) 旧河道NR56を先端とし、幅2.4~3.2mで北東方向に長さ約12mにわたって検出した。断面は、深さ約10cmで下層には砂と小礫があり、その上に拳大から大きいもので人頭大の石を敷き詰め粘質土で覆っていた。礫の間の粘質土中より削



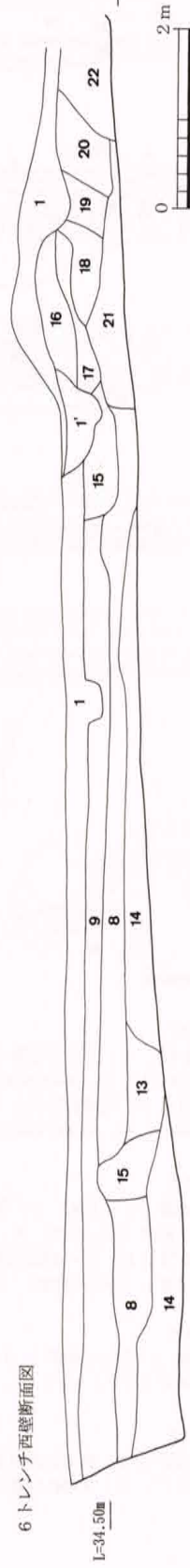
第4図 尾流第6トレンチ検出遺構平面図

6 トレンチ南壁断面図



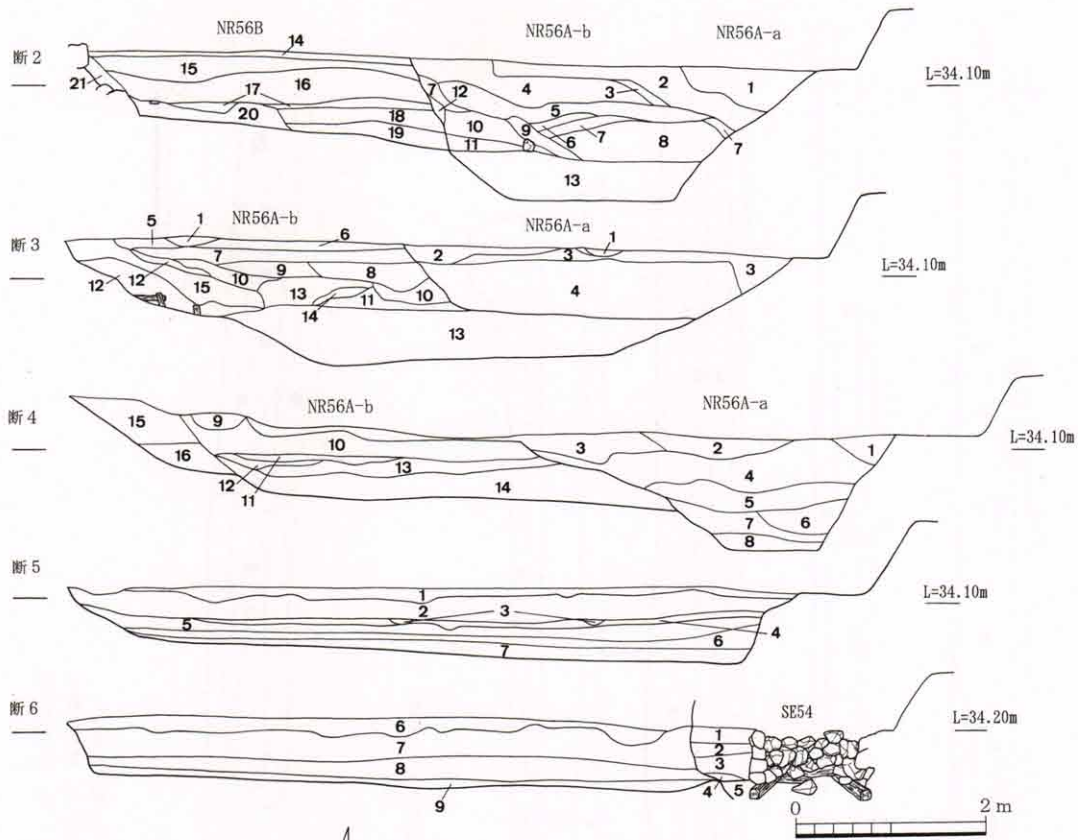
- 1. 耕作土 2. 褐色～灰褐色粘質土混じり (5～20cm) 3. 黄褐色粘質土 4. 明黄褐色粘質土
- 5. 暗褐色粘質土 (浅瓦等含む) 6. 明黄褐色粘性砂質土 7. 灰色粘質土 8. 明黄褐色粘性砂質土 (6層と同じか)
- 9. 黄褐色粘質土 (5～10cm 礫含む) 10. 灰色砂礫 (2～10cm 礫含む) 11. 灰色砂層 12. 黄褐色砂礫 (1～3cm 礫)
- 13. 灰色砂礫 (2～20cm 礫) 14. 灰色砂質土 (2～5cm 礫)

6 トレンチ西壁断面図



- 1. 黄褐色砂質土 2. 褐色砂質土 3. 褐色砂礫 4. 明褐色砂礫 (2～5cm) 5. 黄褐色砂質土 6. 褐色砂層
- 7. 灰色砂礫 8. 黒灰色砂礫 (5～20cm) 9. 褐色砂礫 10. 赤褐色砂礫 (5～10cm) 11. 灰色砂礫 12. 褐色砂質土
- 13. 灰色砂礫 (5～20cm) 14. 黄褐色砂質土 15. 黄褐色砂礫 16. 明褐色砂質土 17. 青灰色粘質土 18. 青灰色粘質土
- 19. 黒灰色粘質土 20. 暗褐色粘質土 21. 暗褐色粘質土砂礫 (5～20cm)

第5図 尾流第6トレンチ南壁断面図



断面-2 東壁

1. 黄褐色砂質土 2. 褐色砂質土 3. 褐色砂礫 4. 明褐色砂礫 (2~5cm)
5. 黄褐色砂質土 6. 褐色砂層 7. 灰色砂礫 8. 黒灰色砂礫 (5~20cm)
9. 褐色砂礫 10. 赤褐色砂礫 (5~10cm) 11. 灰色砂礫 12. 褐色砂質土
13. 灰色砂礫 (5~20cm) 14. 黄褐色砂質土 15. 黄褐色砂礫
16. 明褐色砂質土 17. 青灰色粘質土 18. 青灰色粘質土 19. 黒灰色粘質土
20. 暗灰色粘質土 21. 暗褐色粘質土

断面-3 東壁

1. 青灰色粘質土 2. 黒灰色砂礫 (1~5cm) 3. 黄褐色砂質土 4. 黒灰色砂礫 (5~20cm)
5. 暗青灰色粘質土 6. 黄褐色砂質土 7. 黄褐色砂礫 (1~2cm) 8. 暗褐色砂礫 (5~10cm)
9. 褐色砂質土 10. 暗褐色砂質土 11. 赤褐色砂礫 12. 灰褐色砂質土 13. 黄褐色砂質土 14. 黒褐色砂礫
15. 黄褐色砂質土 16. 明褐色砂質土

断面-4 東壁

1. 赤褐色砂礫 (5~10cm) 2. 黄褐色砂礫 (1~3cm) 3. 黄褐色砂質土 4. 赤褐色砂礫 (1~20cm)
5. 暗赤褐色砂礫 (10~20cm) 6. 赤褐色砂礫 (20~30cm) 7. 黒褐色砂礫 (20~30cm) 8. 黄褐色砂礫 (5~10cm)
9. 青灰色粘質土 10. 灰~赤褐色砂質土 11. 灰白色砂層 12. 灰色砂層 13. 赤褐色砂礫 (1~10cm)
14. 青灰色粘質土 (中世水田面) 15. 黄灰色砂質土 16. 黒褐色砂礫 (2~3cm)

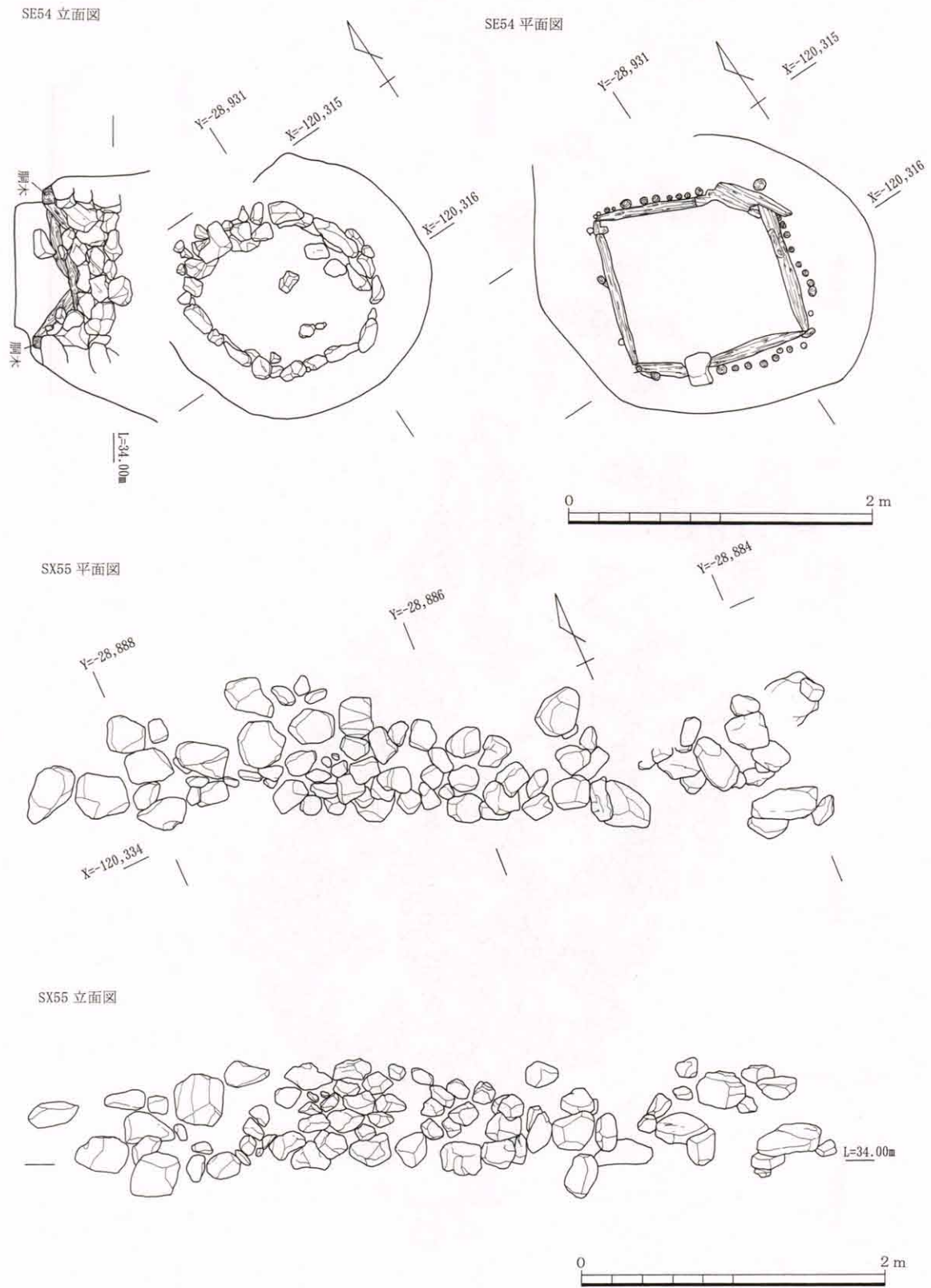
断面-5 東壁

1. 灰色砂礫 2. 暗灰色粘質土 3. 青灰色粘質土 4. 赤褐色砂礫 (1~2cm) 5. 灰色粘質土
6. 赤褐色粘質土 (マンガン) 7. 灰色粘質土礫混 (0.5~1cm)

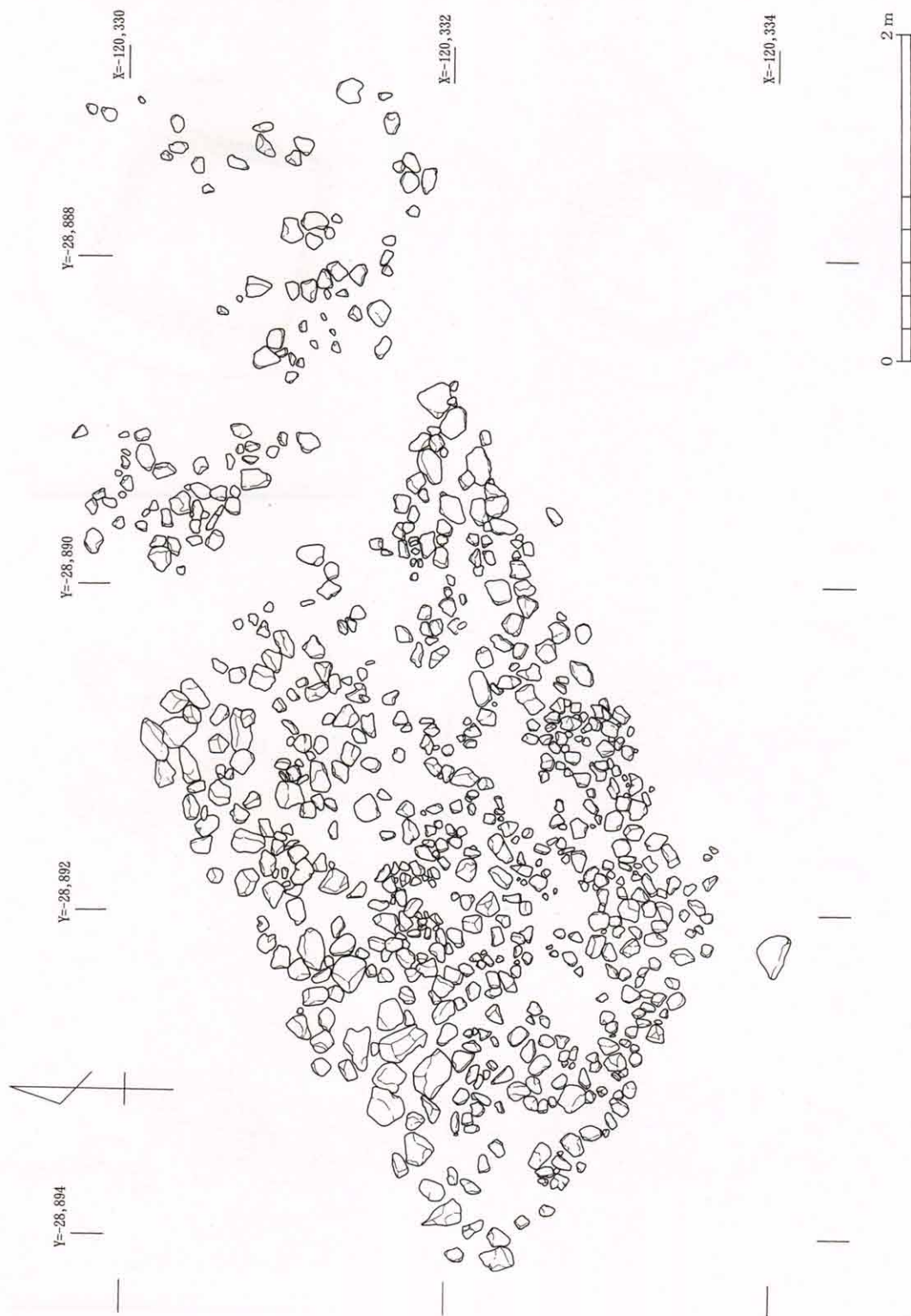
断面-6 東壁

1. 黄灰色砂質土 2. 黄褐色砂質土 3. 褐色砂質土 4. 赤褐色砂層 (1~2cm) 5. 褐色砂質土 6. 褐色砂礫
7. 黄褐色砂質土 8. 黄褐色粘質土 (マンガン) 9. 赤褐色砂礫 (2~5cm)

第6図 尾流第6トレンチNR56断剖面図

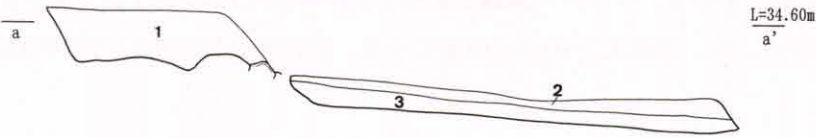


第7図 尾流第6トレンチSE54、SX55平・立面図



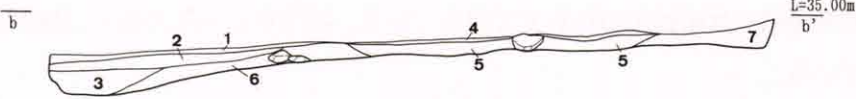
第8図 尾流第6トレンチSX51平面図

SX55 東壁断面図



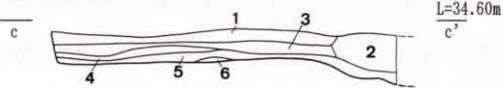
1. 暗褐色粘質土 2. 青灰色粘質土 3. 黒灰色粘質土

SX51 南北断面図



1. 黒灰色砂礫 (SX51) 2. 暗褐色砂礫 (0.5~5cm) 3. 暗褐色粘質砂礫
4. 黒灰褐色砂礫 5. 赤褐色砂礫 (0.5~20cm) 6. 暗褐色砂質土 7. 赤褐色砂礫

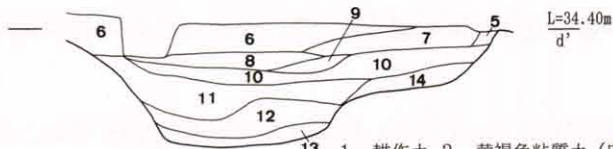
SX51 東西断面図



SX51 南北断面図(西側)

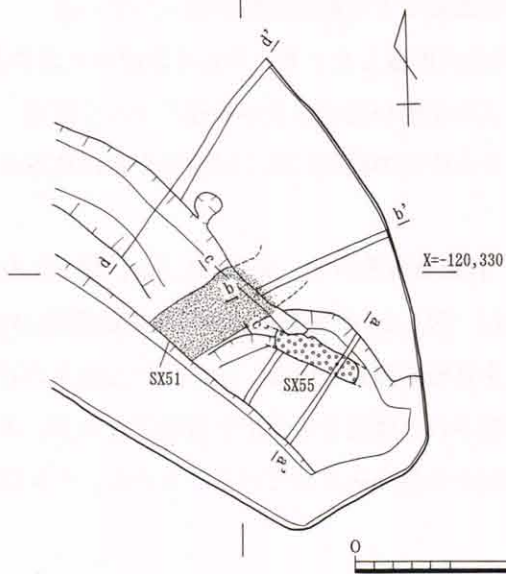


1. 灰褐色砂礫 (SX55) 2. 黄褐色砂質土 (SX55) 3. 赤褐色砂礫
4. 灰色砂礫 5. 灰褐色砂層 6. 赤褐色砂層



1. 耕作土 2. 黄褐色粘質土 (床土) 3. 灰色砂礫 4. 灰色砂層 5. 黄褐色粘質土
6. 明黄褐色砂質土 7. 灰色砂礫 (0.5~20cm) 8. 灰褐色砂質土
9. 褐色砂層 10. 褐色砂質土 11. 灰褐色粘質土 12. 灰色砂礫 13. 灰色砂質土

Y=-28,890



第9図 尾流第6トレンチSX55、SX51断割断面図

り出し高台の無釉陶器や土師器の細片が出土しているが、造営年代については明らかではない。

溝 S D 64(第 4 図・図版第 4-(2)・(3)) 礫敷き遺構 S X 51の東で礫に並行して長さ 5 m にわたって検出した幅 0.5~1.3 m、深さ 0.2~0.3 m の溝である。溝内からは須恵器の杯や土師器が出土した。

護岸施設 S X 55(第 7・9 図・図版第 5-(2)・(3)) 礫敷き遺構 S X 51の東で検出した。基底部の幅約 1.1 m、高さ約 0.7 m で長さ 5.6 m の範囲に、人頭大の石を乱石積みで粘土とともに積み上げており、北側の裏面には暗褐色の粘質土で埋めている。埋土中より瓦器椀・三脚羽釜の脚部や、鍋が出土している。

旧河道 N R 56-B(第 6 図・図版第 5) 護岸の南側では、旧河道 N R 56-A による削平をのがれた中世段階の旧河道がわずかに残っており、断面 2 で検出幅約 3.44 m、深さ約 0.86 m を測り、川底に堆積した暗青灰色の粘質土上面より青磁椀、粘質土中より瓦器椀・瓦質の羽釜などが出土した。

旧河道 N R 56-A(第 6 図・図版第 6・7・8) 今回の調査地の南半部で検出した。旧河道は拳大から人頭大の砂礫や黄褐色の砂質土によって埋まっており、河道の断面観察により大きく二時期の堆積(N R 56-A a と N R 56-A b)に分類する事ができる。

N R 56-A a 断面 2 で検出幅約 4.3 m、深さ約 1.4 m を測り、断面 3 で検出幅約 4.16 m、深さ約 0.74 m を測り、断面 4 では検出幅約 4.04 m、深さ約 1.18 m を測る。断面 5・6 で河道は現小泉川の流れる南に振れる。この堆積層からは少量の瓦片や陶磁器片を含んでいたことから近世以降に埋まったと考えられる。

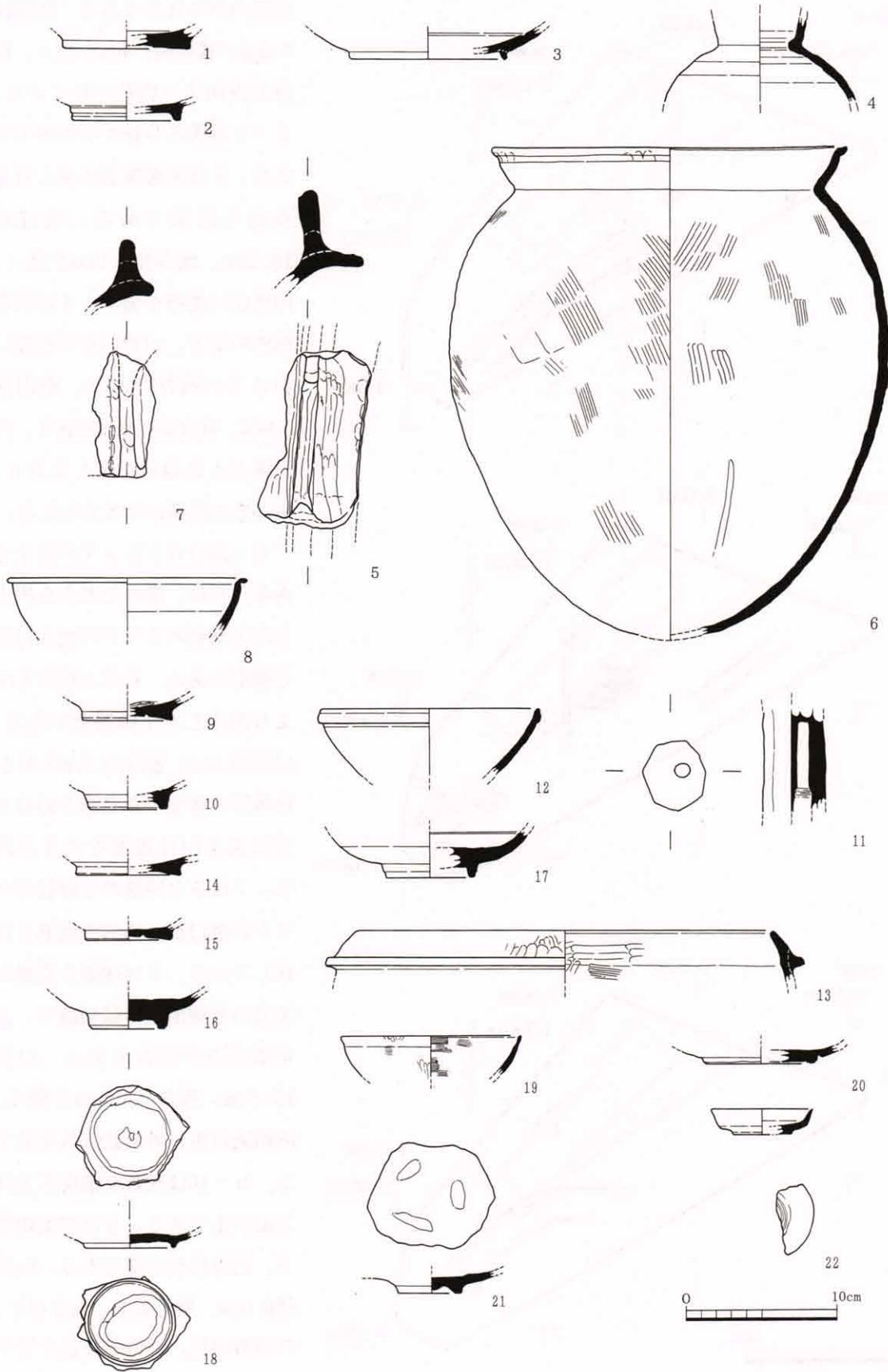
N R 56-A b 断面 3 で検出幅約 3.08 m、深さ約 0.7 m を測り、断面 4 では検出幅約 3.58 m、深さ約 0.76 m を測る。断面 5・6 で河道は現小泉川の流れる南に振れる。この堆積層からは北岸の肩部を中心に緑釉陶器、中国製白磁・青磁、瀬戸・美濃焼などの陶磁器類が出土している。

また、この河道 N R 56-A 以西では、より古い時代に堆積したと考えられる砂礫の上面に青灰色の粘質土層が平面をなしており、上面には牛や人の足跡が洪水による砂礫によって埋まっていた。この層には、瓦器椀片などが入っていることから中世の段階にはこの場所が水田化されていたと考えられる。

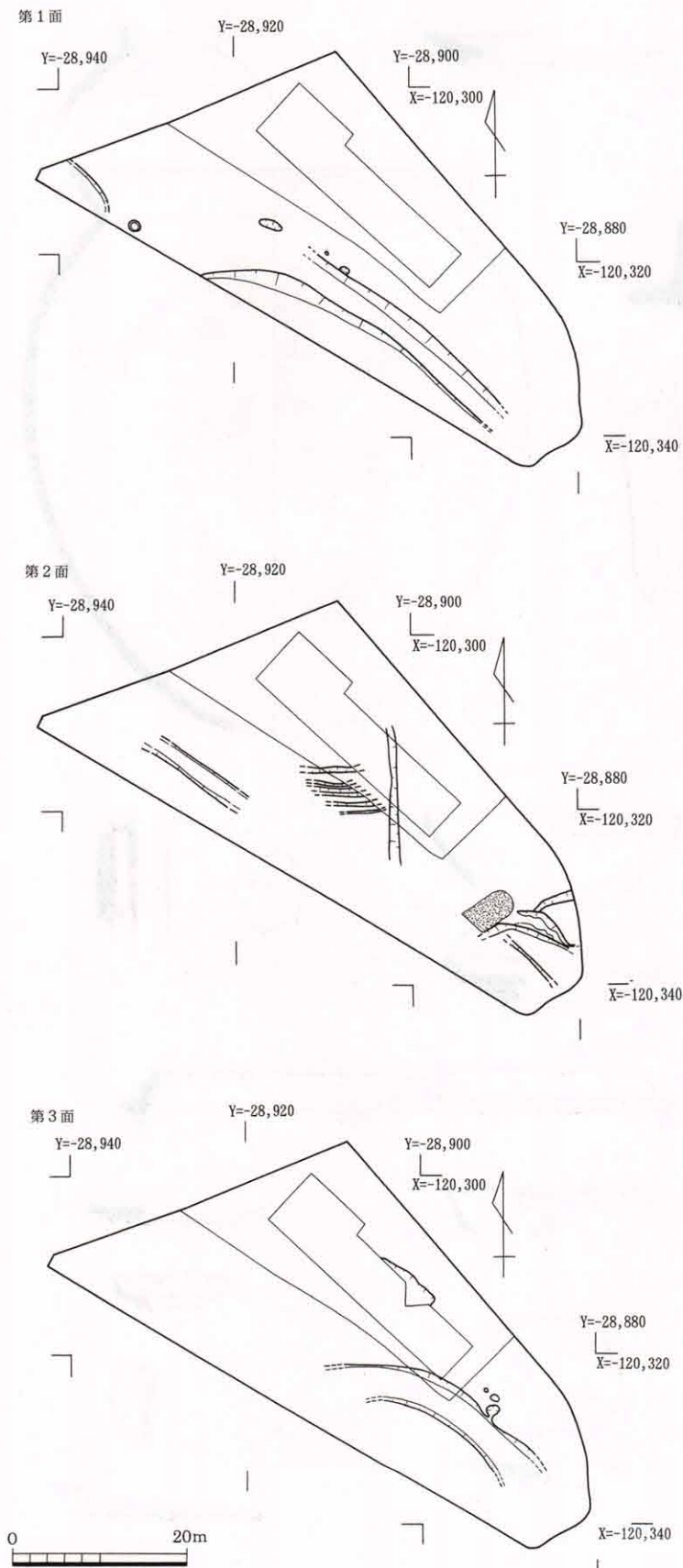
井戸跡 S E 54(第 7 図・図版第 8-(2)・(3)) 石組みの井戸で、直径約 1.5 m、深さ 0.8 m を測る。井戸は、直径約 2 m で素掘りされ、穴の底に一辺 1.2 m の方形に直径 5~10 cm 程度の杭を隙間なく打ち込み、その内側に直径約 20 cm の丸太を井桁に組んでいる。その上に人頭大の石で三段の石組みを円形に構築している。この井戸が構築された時期を示す出土遺物はないが、中世の水田跡を覆っていた砂礫層とその後の堆積層の上面から掘り込まれていることから、中世以降のものと考えられる。

2. 出土遺物(第 10 図・図版第 9・10)

1 から 4 は 5 トレンチの出土である。1 は包含層出土の無釉陶器で、蛇の目高台部である。底部径 8.4 cm、残存高 1.4 cm を測り、内底面に沈線を施す。2 は同じく包含層の出土の緑釉陶器で、



第10図 尾流地区出土遺物実測図



第11図 尾流第6トレンチ変遷図

底部のみの残存である。底部径7.2cm、残存高1.4cmを測り、高台の内面まで施釉されている。3・4は溝SD48からの出土である。3は灰釉陶器の皿と考えられる底部である。底部径10.2cm、残存高2.2cmを測り、内底面に沈線を施す。4は灰釉陶器の壺で、口頸部から肩部にかけての残存である。頸部径5.6cm、残存高6.9cmを測り、内外面とも乳白色を呈しており、東海系の製品かと考えられる。

5~22は6トレンチの出土である。5は、溝SD25から出土した土師質のカマドの焚き口部と鏝部である。6は土坑SX61より出土した土師器甕である。口径23.5cm、器高32.3cmを測る。倒卵形の体部から頸部を斜め上方に開き口縁端部をつまみ出す。7は5と同様の土師質のカマドの焚き口部と鏝部で底部も残存している。8は礫敷き遺構SX51の西側出土の緑釉碗で、上半部のみの残存である。口径15.8cm、残存高3.5cmを測る。内面灰白色、外面緑灰色を呈する。9・10は礫敷き遺構SX51上面出土である。9は無釉陶器で、蛇の目高台部である。底部径6.0cm、残存高1.5cmを測り、外面暗灰色、内面赤褐色を呈する。10は緑釉陶器の蛇の目高台部である。底部径5.2cm、残存

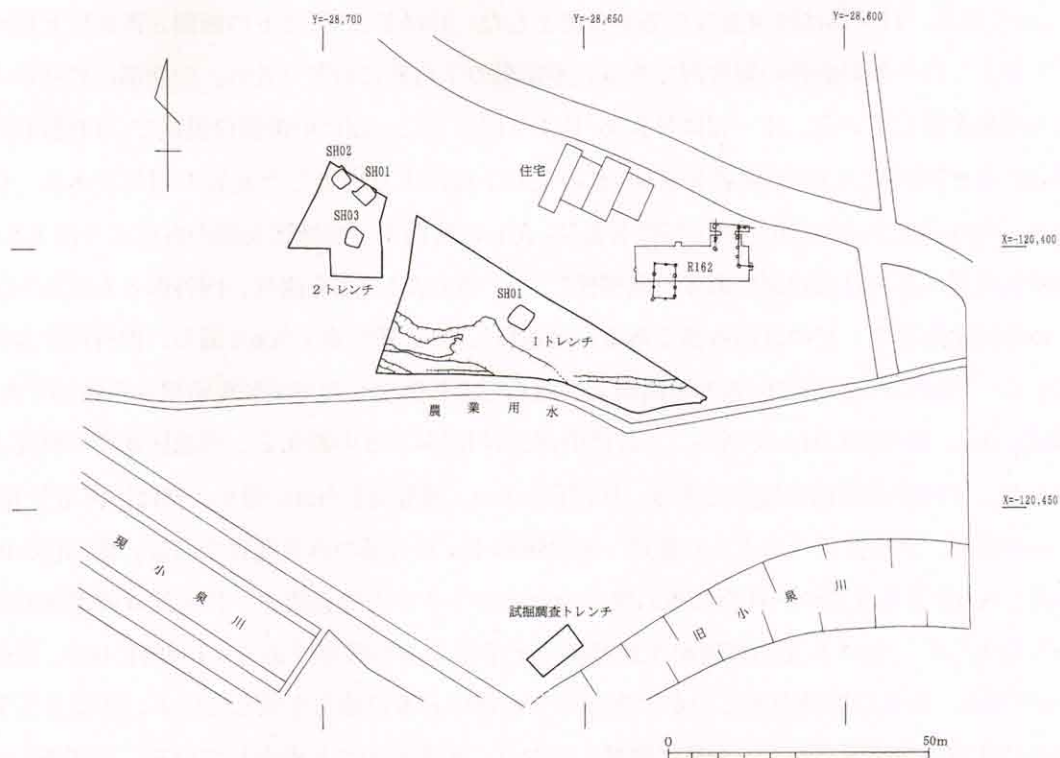
高1.6cmを測る。11～18は旧河道NR56から出土した。11はNR56-A bの断面3西地区北側の肩部より出土した土師器高杯の脚柱部である。不定形の7角形に面取りされ、中空部は棒状の工具により円形を呈している。12・13はNR56-Bより出土した。12は中国製白磁碗で、口径14.4cm、残存高4.4cmを測る。13は旧河道NR56-Bの東端1地区より出土した瓦質の羽釜である。口径27.4cm、残存高3.3cmを測る。14・15はNR56-A bの断面4、西地区北岸の肩部より出土した。14は無釉陶器の蛇の目高台部である。底部径7.0cm、残存高1.4cmを測り、内外面とも灰色を呈する。15は無釉陶器で、蛇の目高台部である。底部径5.8cm、残存高0.9cmを測り、内外面とも灰色を呈する。16は旧河道NR56-A bの断面2、西地区より出土した中国製青磁碗の高台部である。底部径5.2cm、残存高2.54cmを測る。17は旧河道NR56-A bの断面2、西地区北岸の肩部より出土した。中国製青磁碗の底部である。底部径5.8cm、残存高2.5cmを測る。18は旧河道NR56-A aの断面4、西地区より出土した瀬戸・美濃陶器で、高台部のみの残存である。底部径6.0cm、残存高2.0cmを測り底部の内外面に重ね焼きのためのトチンの跡を残す。19～22は護岸施設SX55から出土した。19はSX55東側出土瓦器碗で上半部のみの残存である。口径12.0cm、残存高2.7cmを測る。全体に摩滅が著しいが、内面に5mm毎に6本の暗文を残している。20はSX55上段出土の軟質緑釉陶器である。全体に摩滅しており、釉薬もかなり剥がれている。底部径7.0cm、残存高1.2cmを測る。21はSX55上面東端出土の唐津の灰釉皿である。口部径4.0cm、残存高1.7cm、底部径3.8cmを測る。

3. まとめ

今回の調査結果を簡単にまとめると以下のとおりである。

- ① 検出した遺構では、第6トレンチの溝SD25が最も古く、溝の埋まった最終段階の埋土から古墳時代の須恵器や土師器が出土した。
- ② 第6トレンチの南北溝SD02や礫敷き遺構SX51からは、平安時代の土師器皿や無釉陶器などが出土しており、瓦器碗などの中世遺物を含まないことから中世以前の遺構と考えられる。
- ③ 長岡京跡の条坊復原では、右京七条四坊および西四坊大路が想定されていたが、調査の結果、長岡京期の遺構は検出することはできなかった。
- ④ 護岸施設SX55と旧河道NR56-Bは出土遺物から中世段階の遺構と考えられ、NR56-A以北に残る水田面により、周辺がこの時期には耕地化していたと考えられる。また、NR56-A aとNR56-A bでは、NR56-A aが近年まで流れており、NR56-A bから出土した遺物で最も新しいものが16世紀頃の瀬戸・美濃であり上面で17世紀頃の唐津が出土している事から近世まで河道として機能しており、この肩部にうがたれた土坑SK58やSK65などは用水のための水溜めと考えられる。

(戸原和人)



第12図 上内田地区トレンチ配置図及び周辺発掘調査地

(2)長岡京跡右京第890次(7ANOKD-3地区)・伊賀寺遺跡

調査地は、旧小泉川が大きく蛇行する内側に位置している。改修後の小泉川とは近接しているが、本調査部分は、旧流路から約35m離れている。調査にあたり、平成16年度の試掘調査を受けて実施した本調査部分では、南北に貫く里道が存在したため、東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした。また、1トレンチから南東に約40m離れた地点で、遺構確認のための試掘調査を実施した。

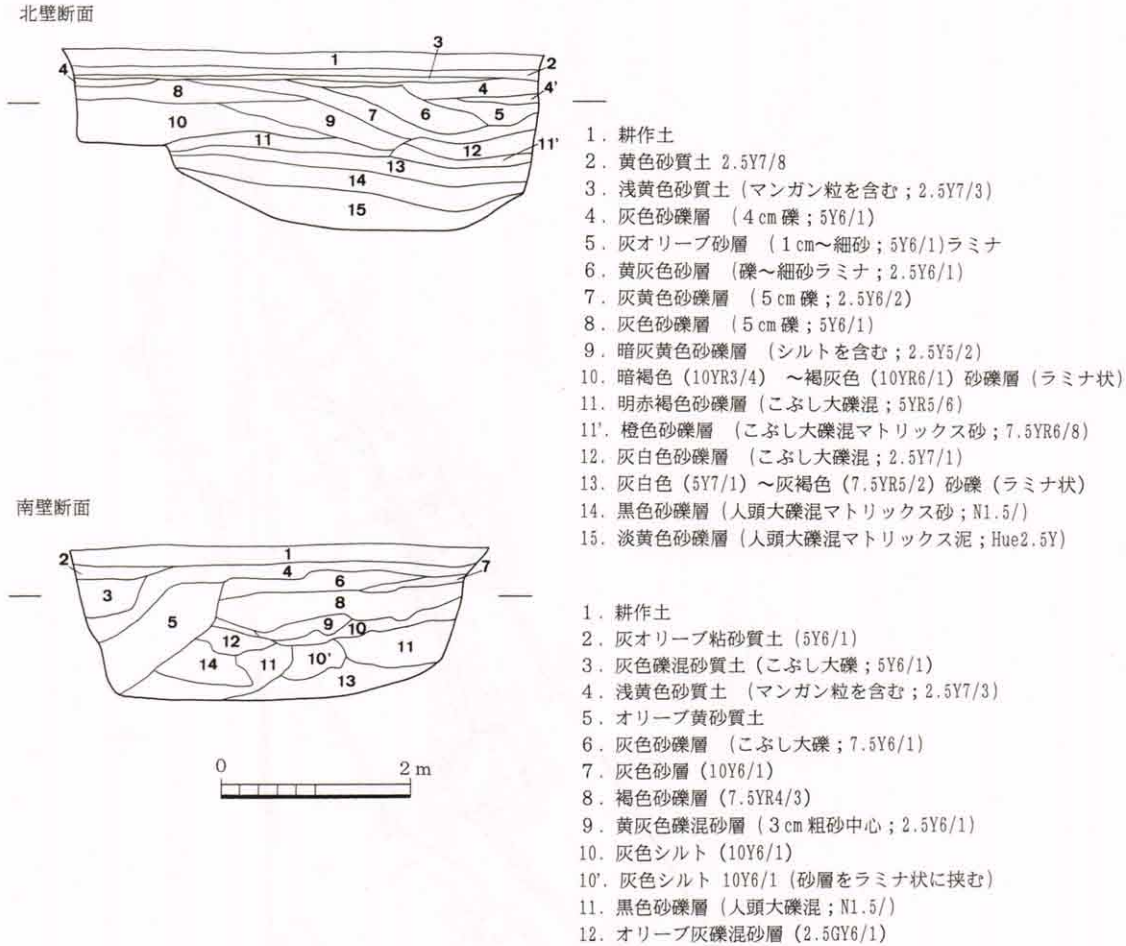
1. 調査の概要

A. 試掘調査(第12・13図・図版第13-(1)・(2))

試掘調査は旧小泉川に近く、1・2トレンチに比べ標高が低かったことから、河川の影響が強いと考えられていた。長辺10m、短辺5mの長方形を呈する面積50㎡の試掘トレンチを設定した。その結果、砂礫層が重層的に堆積する状況が確認できた。約2m掘削したが安定的な遺構面は発見できなかった。砂礫の締まりは非常に悪く、新しい堆積であることが想定できるが、摩滅した若干の土器片以外の遺物はなく堆積年代は不明である。

B. 1トレンチ(第14・15図・図版第11・12-(1))

1トレンチは細長い3角形を呈し、面積は1,000㎡である。調査前から北側がやや高くなっていった。また、東側は極端に高くなっていったが、造成による盛り土であることがわかった。地層断面の検討により、北側は現耕作土直下に、薄い床土がありその下には遺構検出面となる黄褐色の



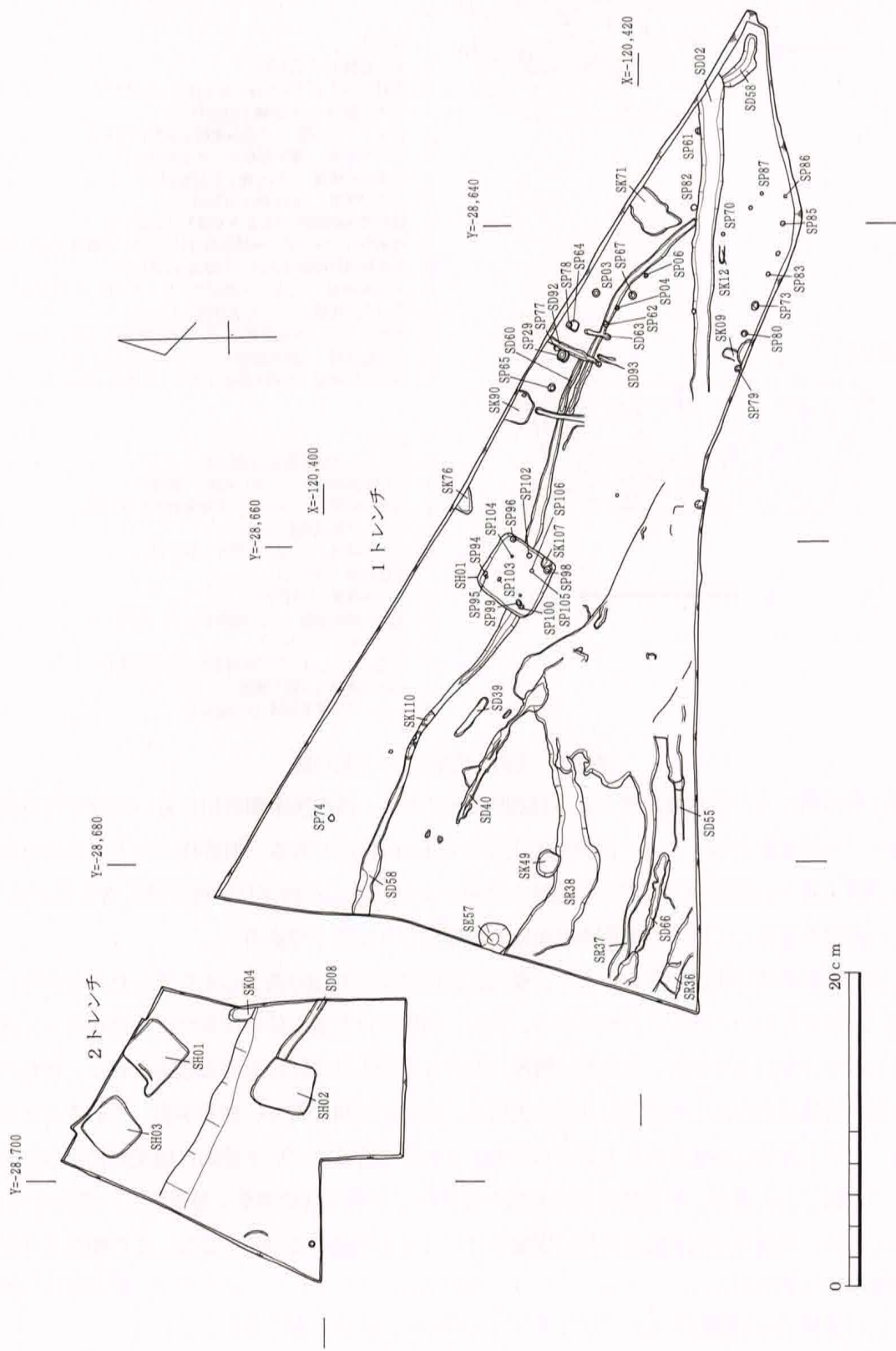
第13図 上内田試掘トレンチ断面図

砂質土が堆積する。検出面までの深さは約0.4mである。調査区南側の川に近い部分では遺構検出面までの堆積層が厚くなり、旧耕作土上面から0.8m程度である。旧耕作土の下には灰色を呈する砂質土層が数枚堆積しており、北部との違いを見せる。その下には礫を多く含む層があり、多くの遺物を包含している。遺構検出面はこの礫混じり層直下である。

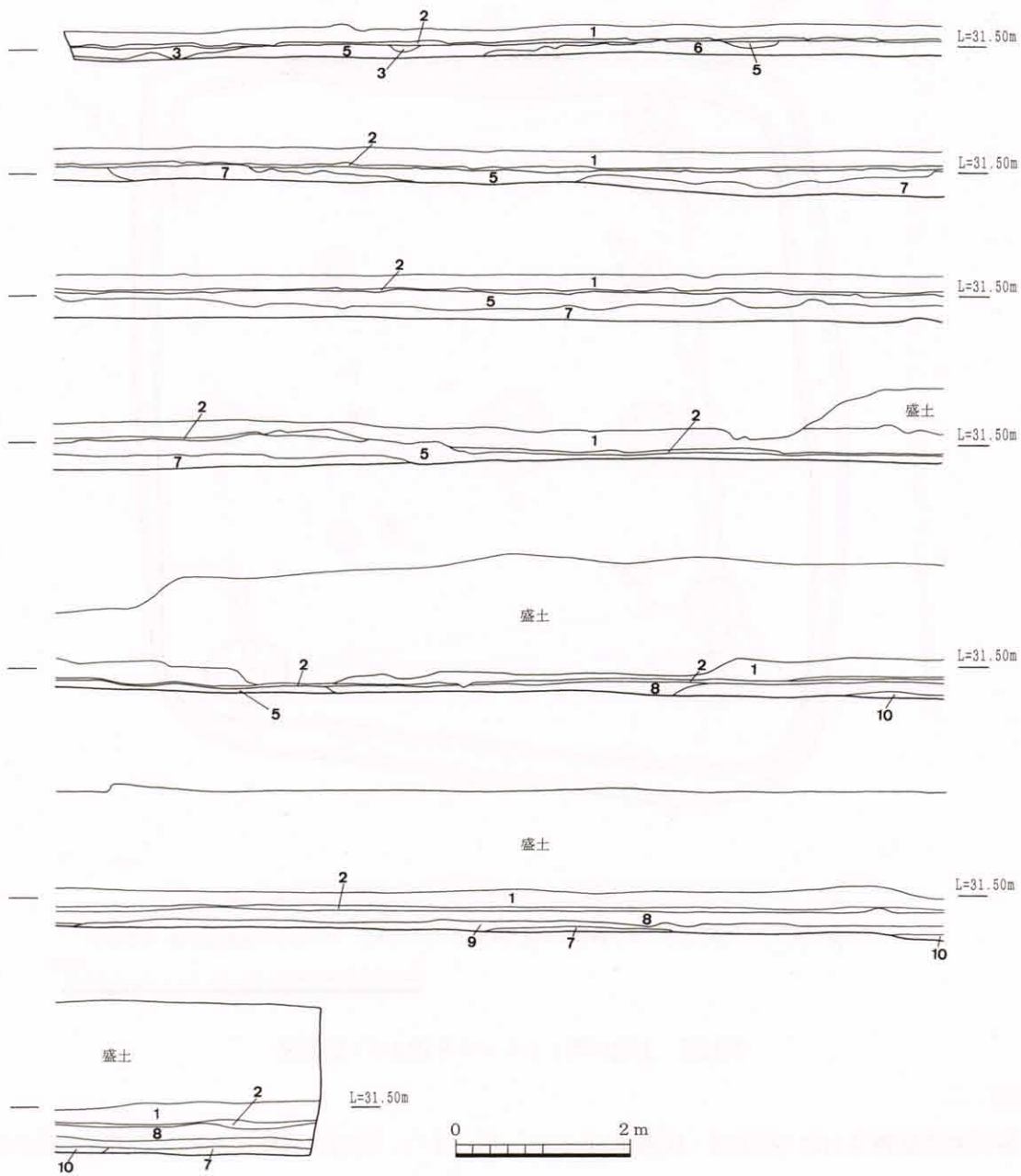
北側の遺構の残存状態が非常に悪く、竪穴式住居跡は約5cmの深さしかなかったことから、大規模に削平が行われていることがわかる。また、南側では礫層上位の砂質土は水流によって運ばれたものではないことから、人為的に数度にわたり土が入れられたものと考えられる。遺跡の多くを覆う遺構検出面直上の礫混じり層の上面は、非常に平坦であり、様相が均一であることから農地として人為的に整地されたと考えられる。この層に含まれている遺物は縄文時代から鎌倉時代まで多岐にわたるが、平安時代末の瓦器や貿易陶磁が出土点数が多く最も新しい遺物である。このことは、土地の造成が鎌倉時代に実施されたことを物語っている。また、この礫混じり層以前の地層中には河川の氾濫が見られるが、整地作業以後には氾濫の形跡がない。鎌倉時代に始まる荘園の整備が河川改修や水路の整備を伴うものであったことがうかがえる。

検出遺構

1 トレンチで竪穴式住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、素掘り溝群、柱穴、土坑、近世野井戸を

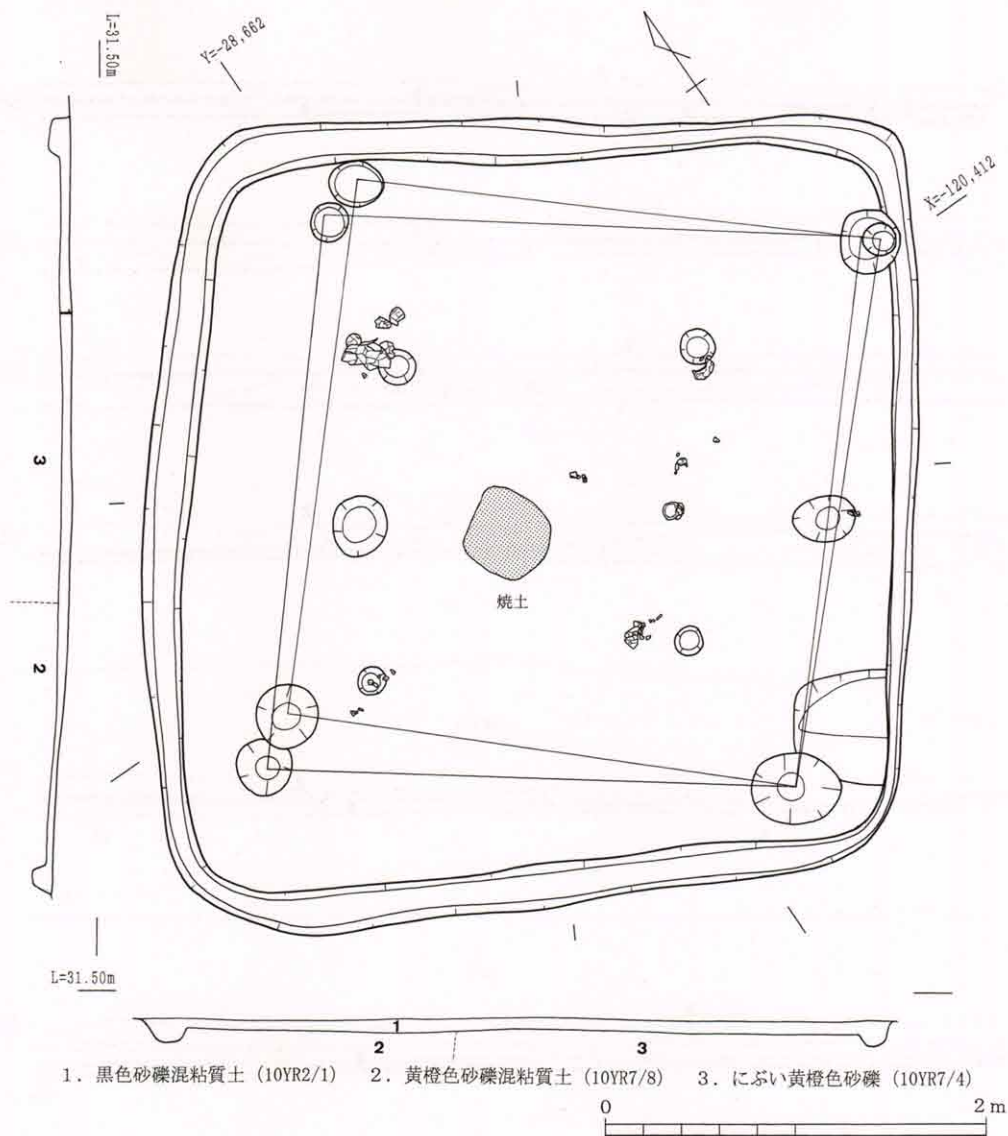


第14図 上内田第1・2トレンチ検出遺構平面図



1. 表土 (耕作土)
2. 明黄褐色砂質土層 (10YR6/8)
3. オリーブ黄色砂質土層 (5Y6/4)
4. 黄褐色砂質土層 (2.5Y5/4)
5. 黄褐色砂礫層 (2.5Y5/4)
6. 黄褐色粘質土層 (2.5Y5/4)
7. 明黄褐色砂質土層 (マンガンを含む; 2.5Y6/6)
8. にぶい黄褐色砂質土層 (10YR5/3)
9. 黄褐色粘砂質土層 (10YR5/6)
10. 褐灰色砂礫層 (10YR5/1)

第15図 上内田第1トレンチ北壁断面図



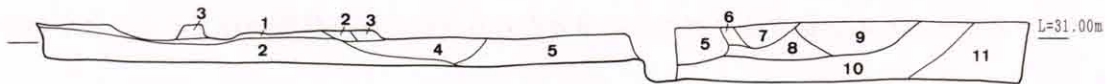
第16図 上内田第1トレンチ S H01平・断面図

検出した。

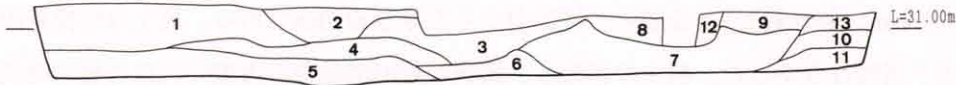
竪穴式住居跡 S H01(第16図・図版第14-(3)・15-(1)) 四辺に周壁溝がめぐる隅丸方形の竪穴式住居跡である。一辺は約4 mを測る。残存状態は非常に悪く、床面は厚さ約5 cmの埋土しか残されていなかった。南東辺の南側には壁に取りつくように土坑 S K107があり、住居跡に伴うものと考えられる。検出面からの深さは10 cmである。竈の痕跡は確認できなかったが、住居跡中央部には焼土が確認できた。支柱穴は P 104~106で構成される4本で、直径20 cm前後と小型であるが、検出面からは50 cmと比較的深いものであった。土器は床面に張り付いた状態で発見され、遺物から古墳時代中期のものと考えられる。建物の軸は北で約35度東に振る。

掘立柱建物跡 S B199(第16図・図版第15-(1)) S H01に重複する1間×2間の掘立柱建物跡である。梁間1.5 m、桁行き2.7 mを測る。北西方向の柱列は中央の柱がずれており、両端の柱穴はそれぞれ2個(S P99・100、S P94・95)接するように検出した。これはほぼ同規模に建物が

断割 51 東壁断面図



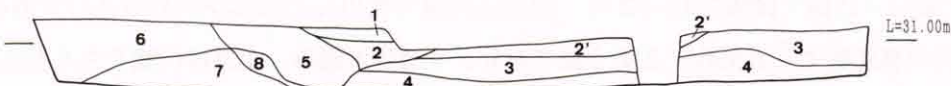
断割 52 東壁断面図



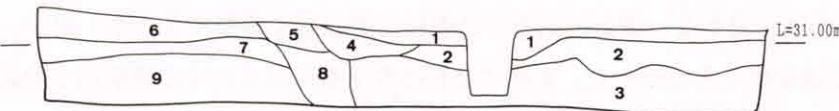
断割 50 東壁断面図



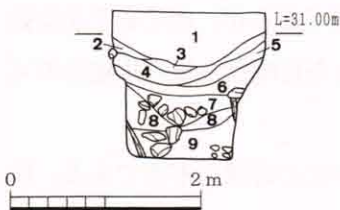
断割 47 東壁断面図



断割 53 東壁断面図



SE57 北壁断面図



断割 51 東壁断面図

1. 褐灰色砂質土 (マンガン; 10YR4/1)
2. 灰オリブ (マンガン; 5Y4/2)
3. 黒褐色粘質土 (土坑埋土; 2.5Y3/2)
4. 暗灰黄色礫混シルト (2.5Y5/2)
5. 黄灰色シルト (2.5Y5/1)
6. 黒褐色礫混砂質土 (2.5Y3/1)
7. 暗灰黄色礫混粘砂 (2.5Y5/2)
8. 黄灰色砂層 (2.5Y5/1)
9. 暗灰黄色粘砂 (2.5Y5/2)
10. 灰色砂礫 (5Y5/1)
11. 暗灰黄色粘砂 (2.5Y5/2)
12. 黄灰色砂礫 (2.5Y4/1)

断割 52 東壁断面図

1. 黒褐色砂質土 (10YR3/2)
2. 灰色砂礫 (5Y4/1)
3. 褐灰色シルト (10YR5/1)
4. 黄褐色礫混砂層 (10YR5/6)
5. 褐灰色砂礫 (10YR4/1)
6. 灰色砂礫 (7.5Y5/1)
7. 灰色砂礫 (N5/)
8. 灰色シルト (N6/)
9. 灰色礫混砂質土 (5Y5/1)
10. 灰色粘砂 (7.5Y5/1)
11. 灰色砂礫 (7.5Y5/1)
12. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/4)
13. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)

断割 47 東壁断面図

1. 灰オリブ粘砂質土 (5Y5/2)
2. 灰色砂礫 (7.5Y5/1)
- 2'. 灰色砂質土 (7.5Y5/1)
3. 灰色粘質土 (5Y4/1)
4. 褐灰色砂礫 (10YR4/1)
5. 灰色砂礫 (巨礫; 5Y5/1)
6. オリブ黒色砂質土 (5Y3/1)
7. 黄灰色砂質土~礫 (2.5Y5/1)
8. 黄褐色礫混砂質土 (2.5Y5/6)

断割 53 東壁断面図

1. 灰色粘土混砂礫 (7.5Y5/1)
2. 暗灰黄色礫混粘質土 (2.5Y5/2)
3. 灰色砂礫 (ラミナ; 5Y5/1)
4. 黒褐色礫粘砂 (マンガン; 2.5Y3/1)
5. 褐灰色粘砂 (10YR4/1)
6. 黒褐色砂質土 (10YR3/1)
7. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
8. 灰褐色礫混砂質土 (10YR5/1)
9. 褐灰色砂礫 (ラミナ; 10YR5/1)

断割 50 東壁断面図

1. 灰色砂礫 (粘土混; N6/)
2. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
3. 褐灰色砂礫層 (10YR5/1)
4. 緑灰色シルト (10G6/1)
5. 灰色礫混粘砂 (5Y5/1)
6. 褐灰色砂礫層 (3. より礫が大きい; 10YR4/1)
7. 緑灰色シルト (10G6/1)

SE57 北壁断面図

1. 灰色砂質土 (マンガン粒を含む; 7.5Y6/1)
2. 黄灰色砂質土 (2.5Y7/3)
3. 灰色砂質土 (マンガン粒を含む; 10Y6/1)
4. 浅黄色砂質土 (マンガン粒を含む; 5Y7/3)
5. オリブ灰色粘砂質土 (マンガン粒を含む; 2.5GY6/1)
6. 明オリブ灰色シルト (2.5GY7/1)
7. 灰色シルト (10Y6/1)
8. 灰色砂混シルト (10Y6/1)
9. 灰色シルト (N6/1)

第17図 上内田第1トレンチSR38・SE57断面図

建て替えられた結果と考えられる。柱穴P98と土坑SK107は切りあい関係から竪穴式住居跡より新しいと考えられる。柱穴SP95出土の遺物から6世紀の掘立柱建物跡であることがわかった。

土坑SK49(第14図・図版第14-(2)) 自然流路SR38に先行する土坑で、平面形は楕円形を呈する。長径約1.8m、短径約1.5mを測り、検出面からの深さ約20cmである。埋土は暗褐色の砂質土であり、出土遺物はなかった。埋土の状況と、遺構の新旧関係から古墳時代以後鎌倉時代までの時期に掘削されたものと考えられる。

土坑SK71・76・90(第14図) 埋土は砂礫で構成されており、不定形である。このような堆積物は洪水性のものであると考えられる。上部が削平され、洪水性堆積物が地盤を掘り込んだ部分の深いところが、土坑状に残ったものと考えられる。

井戸SE57(第14・17図・図版第15-(2)) 調査区西端で検出した掘形が円形の井戸である。埋土が鎌倉時代の整地層より上位の土とよく似ており、下部は木組み、上部は円礫を丸く積んだ井戸である。顕著な出土遺物は存在しなかったが、近世以降の農業用井戸と考えられる。

溝SD02(図版第13-(3)) トレンチ南辺に沿って検出した東西方向を向く、直線の溝である。検出幅は約1.4m、長さ約50mである。調査区東側では明確に溝の底を確認できたが、途中、ベース面が礫になる部分では検出できなかった。東部では粘砂質土をベースにする遺構面で輪郭を確認できたが、掘削を行うと底の確認ができなかった。上層にあった溝の映り込みと考えられる。出土遺物は古墳時代の須恵器、土師器の細片であるが、周辺の遺構からの流れ込みも考えられ、溝の時期を示しているかは不明である。溝の主軸は、ほぼ真東西方向であるが、西で若干北に振っている。この方向は今回の調査地に近接する162次調査で検出した奈良時代の掘立柱建物の主軸方向と一致する。

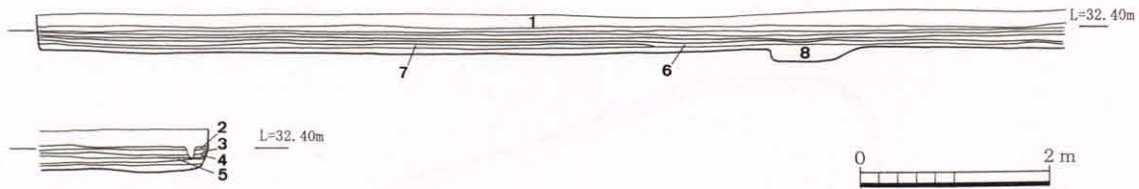
溝SD39 SD58と方向を同じくする溝である。遺物が存在しないため時期は不明である。検出長3m、幅0.5m、検出面からの深さ10cmを測る。

溝SD40 SR30に取り付く溝状の遺構であるが、埋土の状況や、遺構底部の形状から自然流路の残欠と考えられる。古墳時代の土器細片が出土している。

溝SD55・SD02東側の部分で検出した、深さ8cmの浅い溝である。須恵器・土師器の細片が出土している。

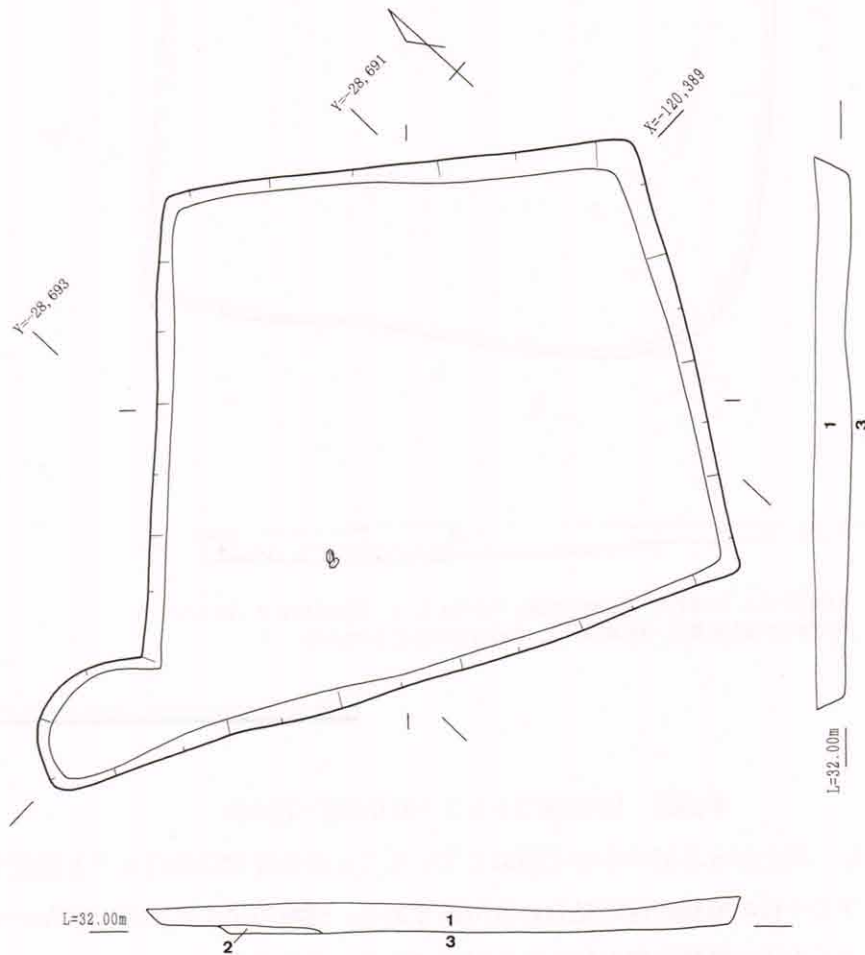
溝SD58 1トレンチを東西に横切る溝である。出土遺物は細片であるため時期の特定はできないが、SH01との関係で古墳時代中期以前のものと考えられる。埋土は礫を多く含む洪水性の堆積物と考えられるが、形状等から本来あった溝を洪水性堆積物が埋めたものと考えられる。遺構の深さは西側で深く、東側で浅くなる。この溝は2トレンチのSD208に続くものと考えられる。

溝SD63 南北方向の深さ5cm以下の浅い溝である。SD92・93・94と平行し、耕作時に生じた溝と考えられる。埋土がSE57のものと類似していることから近世以降のものと想定できる。



1. 耕作土 2. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 3. にぶい黄褐色砂質土 (マンガンを含む; 10YR6/3)
 4. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 5. 灰黄褐色砂質土 (マンガンを含む; 10YR6/2)
 6. 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 7. 黒褐色礫混砂質土 (10YR3/2) 8. 黄褐色砂質土 (2.5YR5/3)

第18図 上内田第2トレンチ北壁断面図



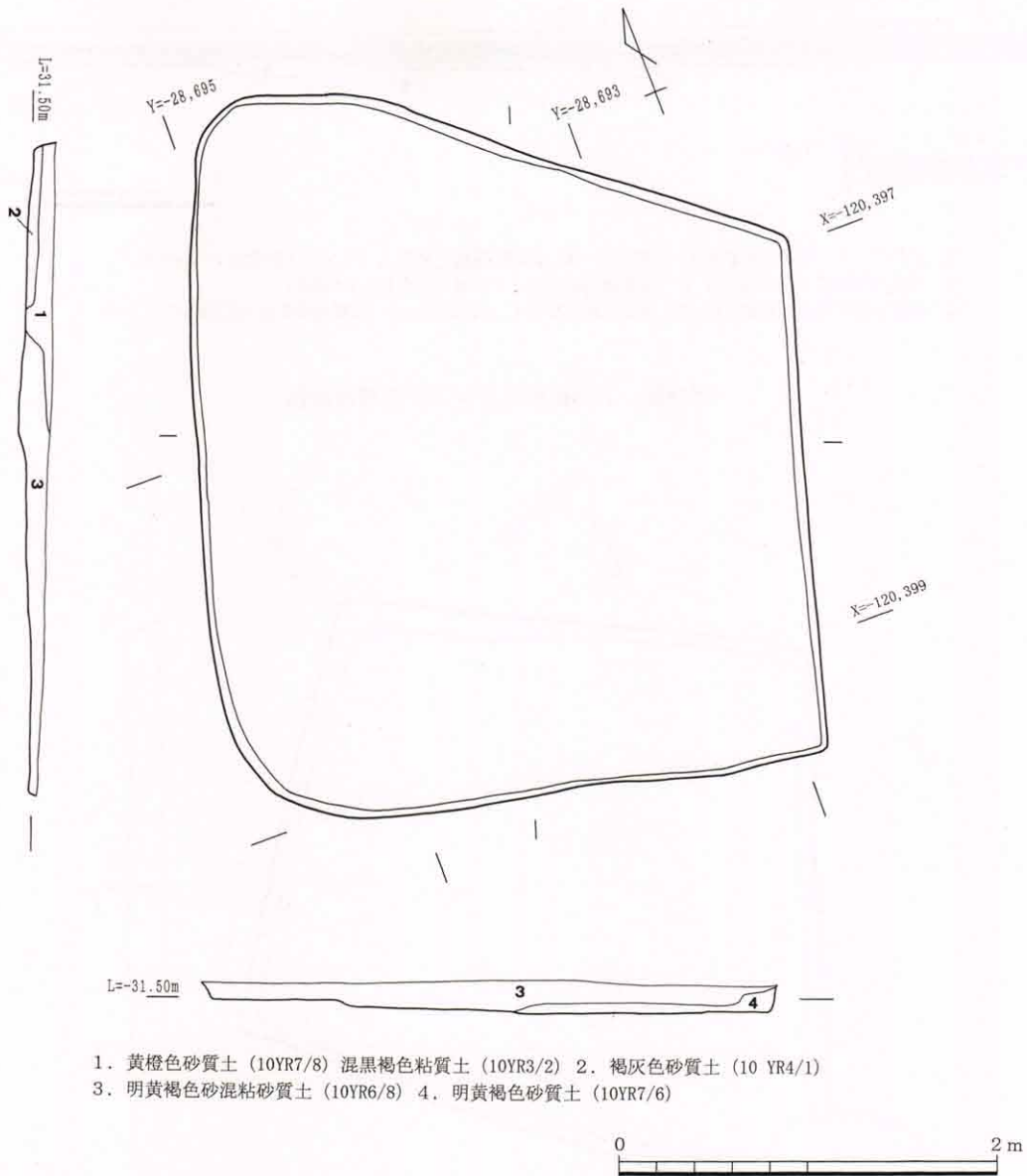
1. 黒色砂礫混粘質土 (10YR2/1) 2. 黄褐色砂礫混粘質土 (10YR7/8) 3. にぶい黄褐色砂礫 (10YR7/4)

第19図 上内田第2トレンチSH01平・断面図

溝SD66 SD40同様自然流路の残欠と考えられる。

溝SD92 南北方向の深さ10cm以下の浅い溝である。SD66・93・94と平行し、耕作時に生じた溝と考えられる。埋土がSE57のものと類似していることから近世以降のものと思定できる。

溝SD93 南北方向の深さ5cm以下の浅い溝である。SD66・92・94と平行し、耕作時に生じ



1. 黄橙色砂質土 (10YR7/8) 混黒褐色粘質土 (10YR3/2) 2. 褐灰色砂質土 (10 YR4/1)
3. 明黄褐色砂混粘砂質土 (10YR6/8) 4. 明黄褐色砂質土 (10YR7/6)

第20図 上内田第2トレンチS H02平・断面図

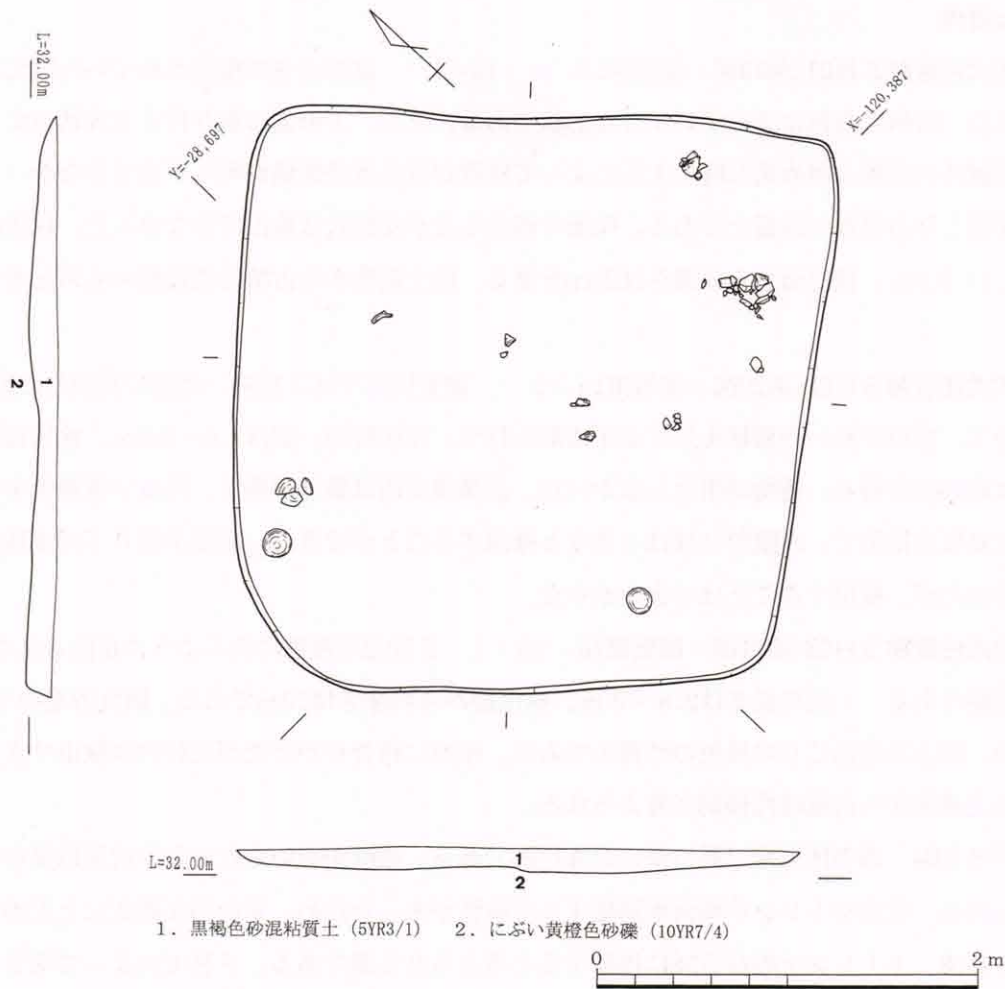
た溝と考えられる。埋土がS E57のものと類似していることから近世以降のものと想定できる。

流路S R36 ラミナ状の堆積状態が見られる川跡である。遺物の出土は確認できなかった。

流路S R37 ラミナ状の堆積状態が見られる川跡である。S R38と合流する。流れていた時期は同時期と考えられる。

流路S R38(第14図・図版第14-(1)) ラミナ状の堆積状態が見られる川跡である。出土遺物には古墳時代後期の土器がある。S R37・S D40と合流し大きな流れとなる。トーンで示した部分を中心に鉄滓やファイゴの羽口がまとまって出土している。

S R38の北肩から調査区の南側に向かいS R36~37より古い川が存在している。断ち割り作業によって確認した結果、表皮のついた自然木と考えられる木材が出土した。人工物が発見できなかったので、断ち割りによる確認調査のみを行った。



第21図 上内田第2トレンチ S H03平・断面図

方形柱掘形を持つ柱穴 S P 29・64 一辺50cmの柱掘形を持つ柱穴である。遺物は小片であるため時期は決定できない。隣接する右京1第62次調査の S B 16204と柱穴規模は変わらないが、2つの柱穴が対であるとすれば、方位は右京第162次のものとは一致しない。

円形柱穴群柱穴には小形のもの、やや大きなものの2種類が存在する。小形なものの中には瓦器の碎片を含むものがあった。S P 03や S P 67は出土遺物から奈良から平安時代初めの時期と考えられる。2つの柱穴の柱間寸法は2.4mであるが、これと対応する柱穴は検出できなかった。

C. 2トレンチ(第12・18図・図版第10-(2))

1トレンチ西側に設けたトレンチで、調査範囲内では中央部に東西方向に走る段差が存在した。この段差の上の部分に設定した平成16年度試掘第3トレンチでは、竪穴式住居跡と考えられる遺構の一部が発見されていた。南部は遺構検出面と考えられる面が急速に下降していき、1トレンチ S R 37・38の下層にある流路跡の南岸に当たる可能性もあるが、なだらかに下っていくことから、今後の調査によって明らかになると考えられる。最も深い南西隅では弥生時代の土器が出土している。

検出遺構

竪穴式住居跡 S H01(第19図・図版第15-(3)・16-(1)) 試掘調査で確認されていた竪穴式住居跡である。四隅は直角にならずいびつな形状である。また、方形部に取り付く土坑状の出っ張りは、試掘時の掘削と埋め戻し時の土圧によって層位が乱れ前後関係が明らかにできなかった。埋土は礫混じりの黒色の砂質土である。床面を精査したが支柱穴は検出できなかった。住居跡の一边は2.4~3.0m、検出面からの深さは20cmを測る。出土遺物から古墳時代後期のものと考えられる。

竪穴式住居跡 S H02(第20図・図版第16-(2)) 調査区内では1段低い南部で検出した竪穴式住居跡で、西辺が長い台形状を呈する平面形を持つ。住居跡の一边は2.6~3.5m、検出面からの深さは約15cmを測る。遺物は出土しなかった。遺構検出面は鉄分が多く、明るい黄褐色を呈し、埋土は粘質の褐色で、肉眼的にははっきりと確認することができた。床面を掘り下げ支柱穴の確認に努めたが、検出することはできなかった。

竪穴式住居跡 S H03(第21図・図版第16-(3)) S H02の西側に並ぶように検出された竪穴式住居跡である。一边の長さは2.8~3m、検出面からの深さは10cmである。隅丸方形の平面形を持つ。埋土は礫混じりの黒色の砂質土である。床面に精査をかけたが支柱穴は検出できなかった。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

井戸 S E04 調査区東壁で見つかった井戸跡である。漆喰が用いられており近世以降の井戸と考えられる。里道やトレンチ壁面が崩壊する可能性があったため、平面的な確認にとどめた。

溝 S D08 1 トレンチの S D58 に接続すると考えられる溝である。S H02によって壊されているが、この場所付近で浅くなり、確認できなくなる。遺物は検出することができなかった。

2. 出土遺物

A. 1 トレンチ(第22・23図・図版第17・18)

竪穴式住居跡 S H01 1 は土師器の甕である。外面の調整は摩滅のため不明、内面は削りである。胎土にはチャートや長石、頁岩の摩滅の進んだ砂粒が含まれており、乙訓地域在地の特徴を見せる。口縁端部が摩滅のため特徴がはっきりしないが布留式土器と考えられる。この他に小型丸底壺も出土しているが、遺存状態が悪く復元実測することができなかった。

掘立柱建物跡 S B199 2 は、掘立柱建物を構成する S P95 から出土した須恵器杯身である。これ以外には時期を示す遺物は存在しない。

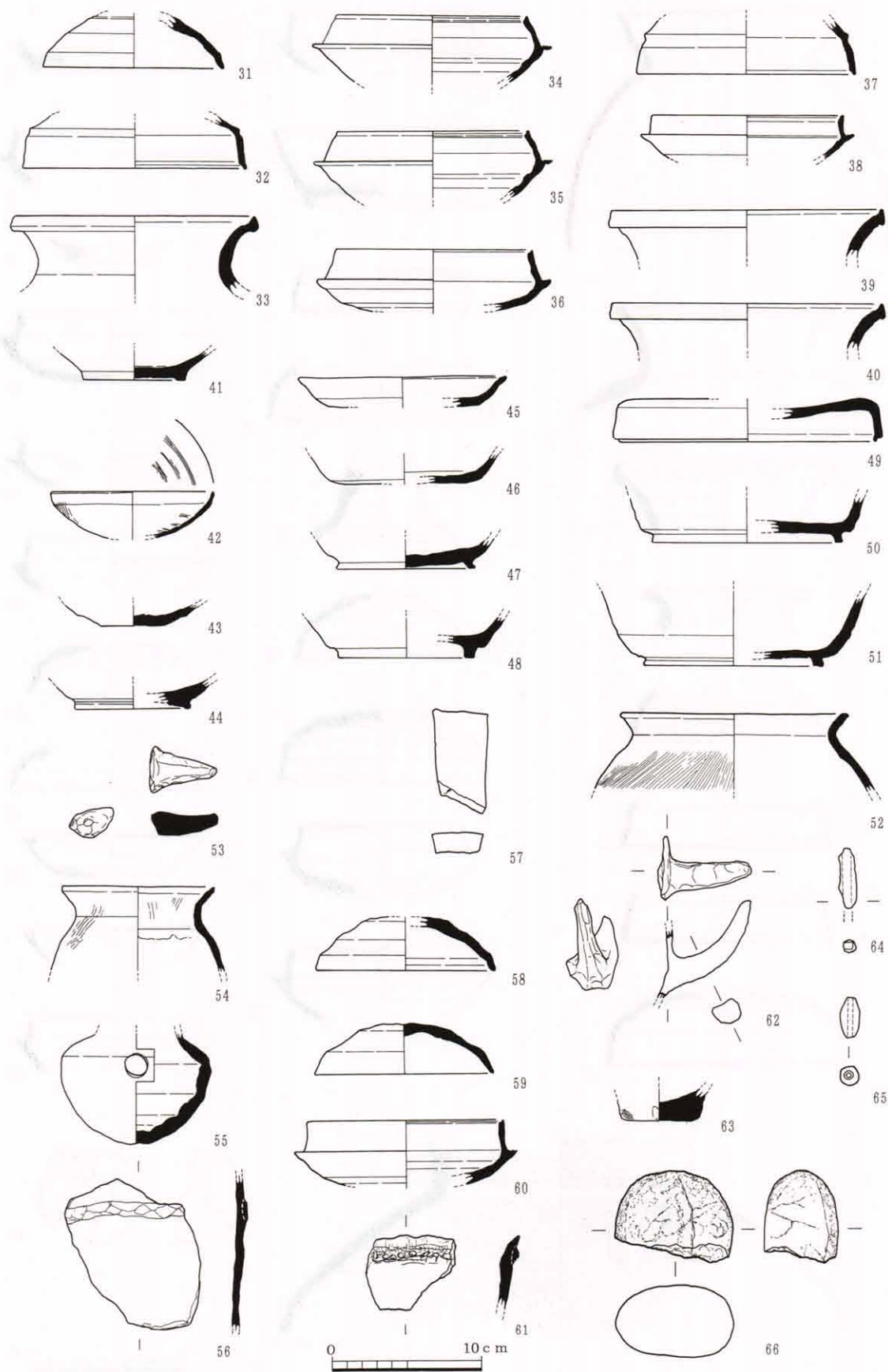
土坑 S K42 5 は須恵器杯身である。6 は素地が須恵質の緑釉陶器の碗である。外面には回転削りの跡が残る。釉薬は部分的にしか残されていない。高台は削り出し高台である。

柱跡 S P03 3 は奈良時代から平安時代前半にかけての須恵器杯 B である。

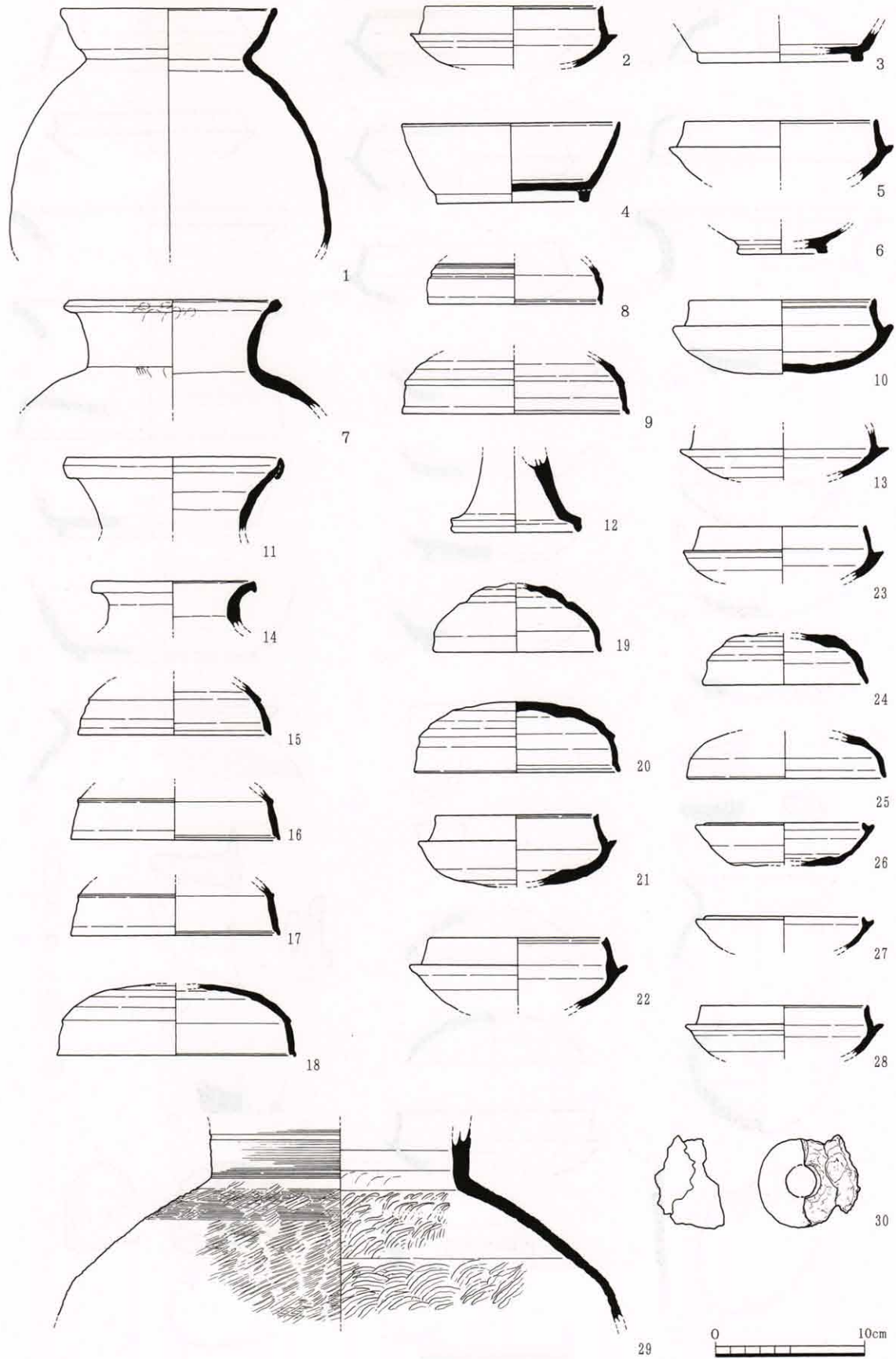
柱跡 S P27 鉄滓片が出土している。

柱跡 S P67 4 は長岡京期前後の須恵器杯 B である。

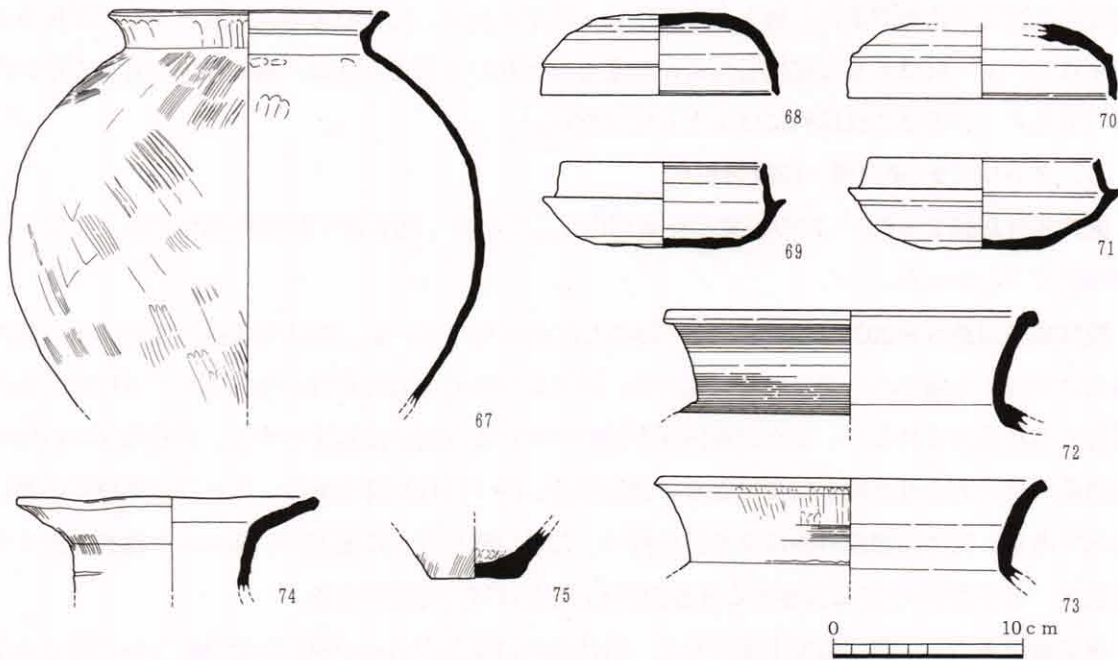
柱跡 S P70 7 は須恵器の甕である。焼成が悪く内外面の遺存状態が非常に悪い。



第22図 上内田第1トレンチ出土遺物実測図(1)



第23図 上内田第1トレンチ出土遺物実測図(2)



第24図 上内田第2トレンチ出土遺物実測図

溝S D02 8～13までの須恵器が出土した。いずれも古墳時代後期と考えられる遺物である。

溝S D40 31～33が出土した。いずれも古墳時代後期の須恵器である。

溝S D55 37～40が出土した。いずれも古墳時代後期の須恵器である。

井戸S E57 41は、青磁碗底部である。内面は施釉されているが、外面にはない。遺物は埋土の特徴と周辺調査における井戸の形状から、遺構の年代を示すものとは考えられない。

流路S R36～38 3本の川は1本にまとまるが遺物の大半は合流地点より東側で出土した。出土遺物には、14～30、34～36の古墳時代の遺物が出土した。出土遺物の大半は須恵器の杯身・杯蓋で、土師器は甕の体部片などに限られ図化できるものはなかった。古墳時代後期初頭から末までの遺物が見られる。30はフイゴの羽口片で復元可能なものであったが、他にも復元図化できない別個体が存在する。また、鉄滓も図版第18-(2)で示したように出土している。

包含層出土遺物 42～66が出土した。42は瓦器碗である。43は白磁の皿である。内外面施釉されている。44は軟質の生地の緑釉の底部である。45は土師器の皿で内面及び外面屈曲部がナデ調整、底部はケズリが施される。46は須恵器杯A、47・50・51は須恵器杯Bである。49は須恵器の葉壺の蓋と考えられる。53は土師質の土馬の尾の部分と考えられる。57は硬質の平瓦片である。上面は布目が残されており、下面はナデ調整である。側端面は削られる。小型瓦の可能性が指摘できる。52は土師器の甕である。外面には粗いハケが残される。54は小型の土師器甕で内外面ナデ調整である。角閃石・雲母が胎土中に認められることと、色調から生駒山西麓産の土器と考えられる。55は須恵器ハソウの体部である。58～60は須恵器の杯身、杯蓋である。62は土師器の把手である。63は弥生土器底部である。後期以降の時期と考えられる。64は四角柱の鉄製品である。鉄鏃基部の可能性もある。65は滑石製の棗玉である。66は縄文時代晩期凸帯文土器深鉢体部である。胎土には直径7ミリ以下の石英、長石の角張った砂とともに雲母片が含まれる。61は縄文時

代晩期凸帯文の深鉢である。胎土には直径5mm以下の石英、長石の角張った砂とともに雲母片が含まれる。56・61はともに花崗岩地帯からもたらされたと考えられる。66は緑色の石材を用いた磨石である。石器はこれ以外には出土していない。

B. 2 トレンチ(第24図・図版第17)

竪穴式住居跡 S H 201 70の須恵器杯蓋が出土している。他には土師器体部片が出土しているが図化できなかつた。

竪穴式住居跡 S H 203 67～69、71～73の土器が出土している。67は土師器の甕である。体部外面は頸部から強いハケが放射状に広がる。胎土には長石・石英が目立つ。チャート片など在地特有の石材は含まれない。また口縁内面が強いナデにより弱い段状を呈する。諸特徴から台付の東海系の甕である可能性が指摘できる。68は杯蓋、69・71は杯身である。72・73は須恵器の甕口縁部である。72は口縁部外面にカキ目を持つ。73は口縁部外面に縦方向に粗いハケ調整の後ナデを施す。S H 203の土器は隣接する S H 201の土器とはほぼ同時期である。

包含層出土 74・75は弥生土器である。74は壺の口縁部であるが調整は摩滅のため不明である。75の底部は外面ハケ調整である以外摩滅のため他の調整は不明である。

3. まとめ

18年度調査では、多くの時期の遺構や遺物が検出できた。

縄文時代 縄文時代晩期の土器だけが包含層から出土している。当該期の活動が周辺であったことをうかがわせる。

弥生時代 1 トレンチ、2 トレンチともに弥生土器片が出土しているが、遺構は検出できなかった。近接する下海印寺遺跡では弥生時代後期の土器が発見されていることから周辺に遺構が存在する可能性は否定できない。

古墳時代 明確な遺構を伴う時期は古墳時代であるが、2 時期の住居跡を検出できた。1 つは古墳時代中期であり、もう1 つは古墳時代後期初頭である。中期の竪穴式住居跡は1 辺4 mと後期のものに比べやや大型で、周壁溝を持ち、支柱穴も4 か所明確であった。一方、2 トレンチで発見された3 か所の竪穴式住居跡は遺物が出土するが、規模が一辺3 m以下のものもあり小型で、支柱穴をどれも検出することができなかった。住居跡としては非常に変則的である。こうした竪穴式住居跡も S R 38より南側に展開しないことは、これらの住居跡が集落の南限であったことを示している。

S R 38の東側で鉄滓やフイゴ羽口が半径2 m程度の範囲の中で集中して出土した。その範疇では6世紀前半の須恵器もまた比較的多く出土した。これが一連のものであるとすれば、1 トレンチの S B 199や2 トレンチ S H 201～203と同時期のものになる。調査地の北側に広がる古墳時代集落では、鉄製品の生産が行われていたことが明らかになった。

奈良・平安時代 明確な遺構としては建物としてまともな柱穴がある。本調査地に隣接する右京第162次調査では奈良時代の掘立柱建物群が検出されているが、調査地内においても同

時期の遺物は検出できている。時期は不明であるが右京第162次調査の建物とほぼ軸を同じとするSD02が検出されている。古墳時代後期より新しく鎌倉時代より古い遺構であるが時期は特定できない。軸がほぼ東西方向であることから長岡京期の可能性も否定できないが、条坊側溝の推定値とは合致しないため、奈良時代の可能性が高い。

出土遺物の中には、瓦があり近くに瓦を用いた建物があったものと想定できる。また、平安時代の緑釉などが出土しているが、関連する遺構などは明確ではない。

調査地内では流路跡の前後関係を確認するために下層の断割調査を行った。

その結果、今回の調査地の地形的成り立ちは、旧小泉川の扇状地であった場所が比較的本流が安定し、陸化した後に人々の生活が営まれるようになるが、その陸化した面を小河川が流れ、時に洪水によって土石流をもたらしたことが明らかになった。古墳時代の人々はこうした小河川が流れる範囲を避け集落を営んでいた。鎌倉時代に入ると大きく土地の改変が行われ、周辺の河川の整備が実施され、水田が営まれるようになり現代に至っていることが遺構と地層の観察からわかるようになった。^(注9)

(中川和哉)

注1 京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』 第4分冊 2004

注2 岩松保・近藤奈央「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

岩松保・松井忠春・竹井治雄「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

岩松保・竹井治雄ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

注3 山中章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会) 1982

注4 渡辺誠編『京都府長岡京市下海印寺遺跡範囲確認調査報告書(長岡京文化財調査報告書第10集)』長岡京市教育委員会 1982

注5 山本輝雄・岩崎誠「長岡京跡右京104次調査概要(7ANOND地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

注6 中川和哉ほか『京都府遺跡報告書(下植野南遺跡)』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999

注7 石井清司・藤井整ほか『京都府遺跡報告書(下植野南遺跡Ⅱ)』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004

注8 注7とおなじ

注9 調査中、当調査研究センターの増田富士雄理事の指導、ご意見を参考にして地形形成と土地利用の復元を行った。

圖 版



(1) 第5トレンチ全景
S D48・49・50(西から)



(2) 第5トレンチ上段(南から)



(3) 第5トレンチ全景
S D48・49・50(北から)



(1) 第 6 トレンチ S D25 西断面
(東から)



(2) 第 6 トレンチ S D25 (西から)



(3) 第 6 トレンチ S D25 東断面
(西から)



(1) 第6トレンチS X63集石遺構
(東から)



(2) 第6トレンチS D02(南から)



(3) 第6トレンチ東西溝群
(東から)



(1) 第 6 トレンチ S X51 東西断面
(南から)



(2) 第 6 トレンチ S X51・S D64
(北東から)



(3) 第 6 トレンチ S X51・S D64
(南西から)



(1) 第6 トレンチNR56B・
S X55断面(西から)



(2) 第6 トレンチS X55
(南西から)



(3) 第6 トレンチS X55(東から)



(1) 第6 トレンチNR56A
(西から)



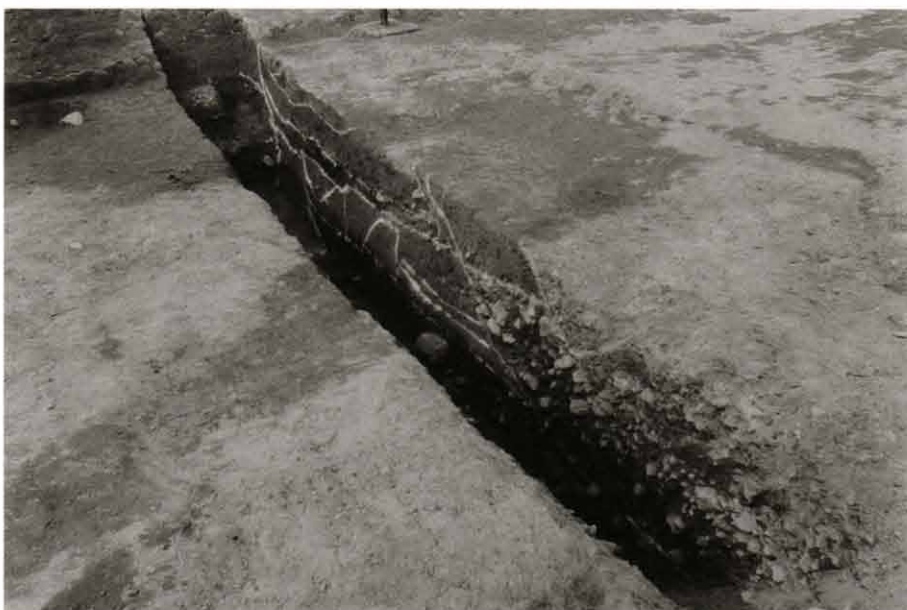
(2) 第6 トレンチNR56B
(南東から)



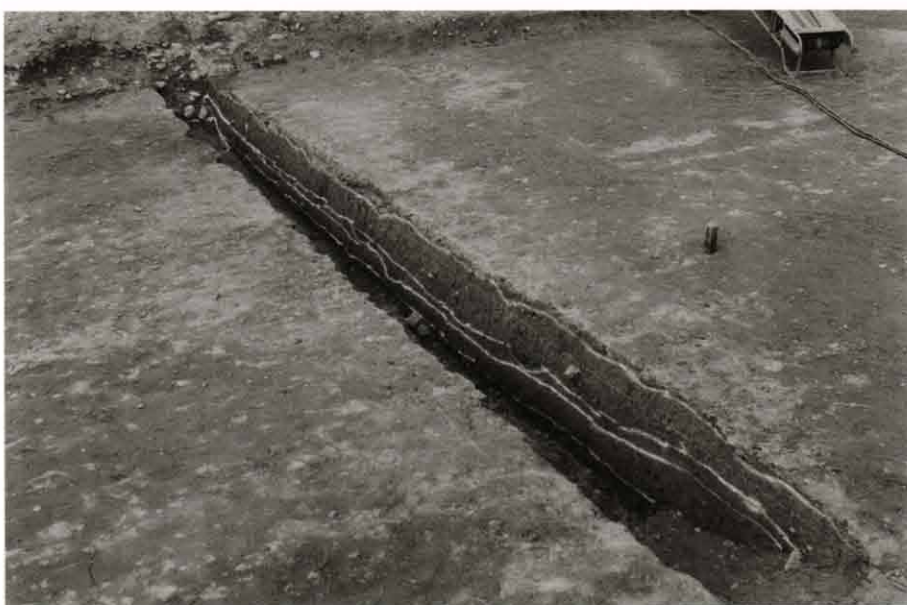
(3) 第6 トレンチ南半部(南から)



(1) 第6 トレンチNR56A 断面3
(西から)



(2) 第6 トレンチNR56A 断面4
(西から)



(3) 第6 トレンチNR56A 断面5
(西から)



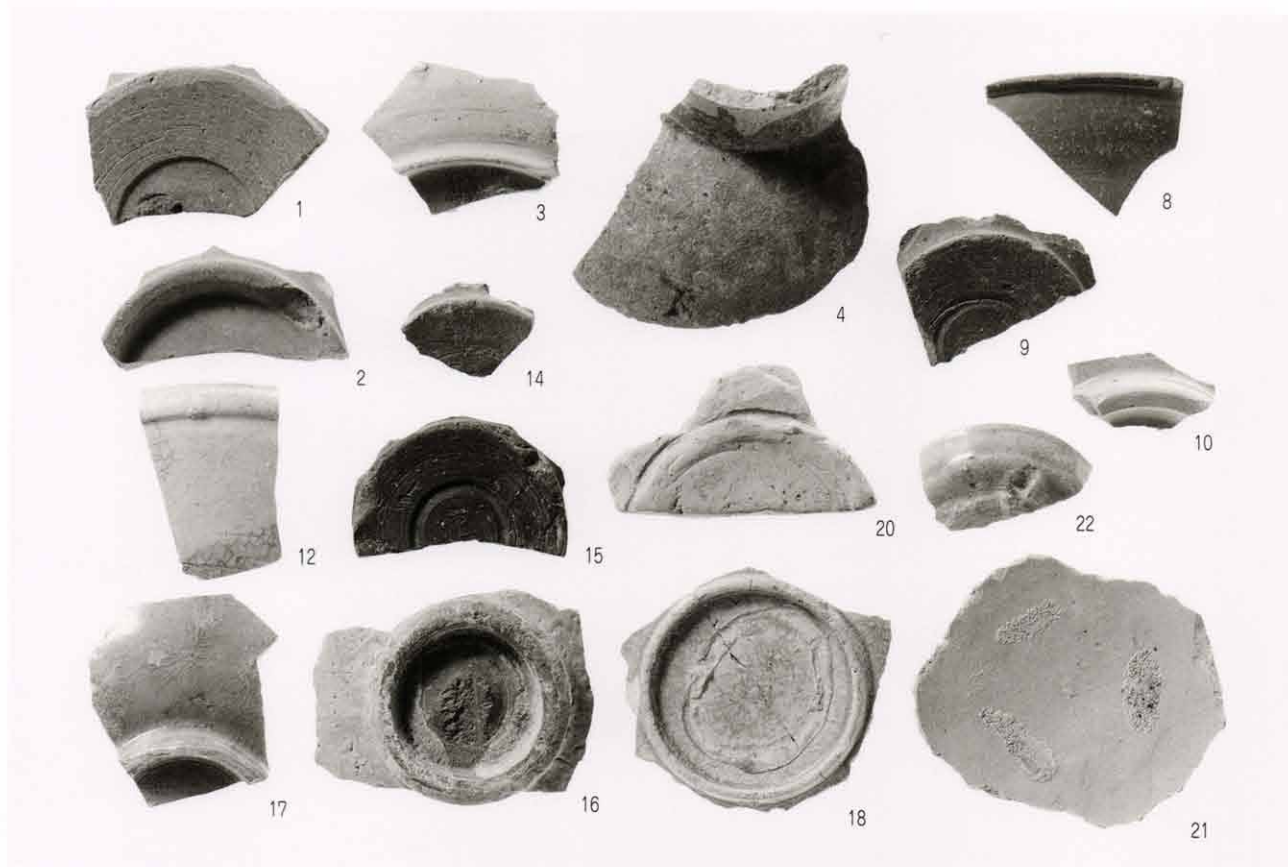
(1) 第6 トレンチNR56A断面6・
SE54(西から)



(2) 第6 トレンチSE54下層
(西から)



(3) 第6 トレンチSE54上層
(西から)

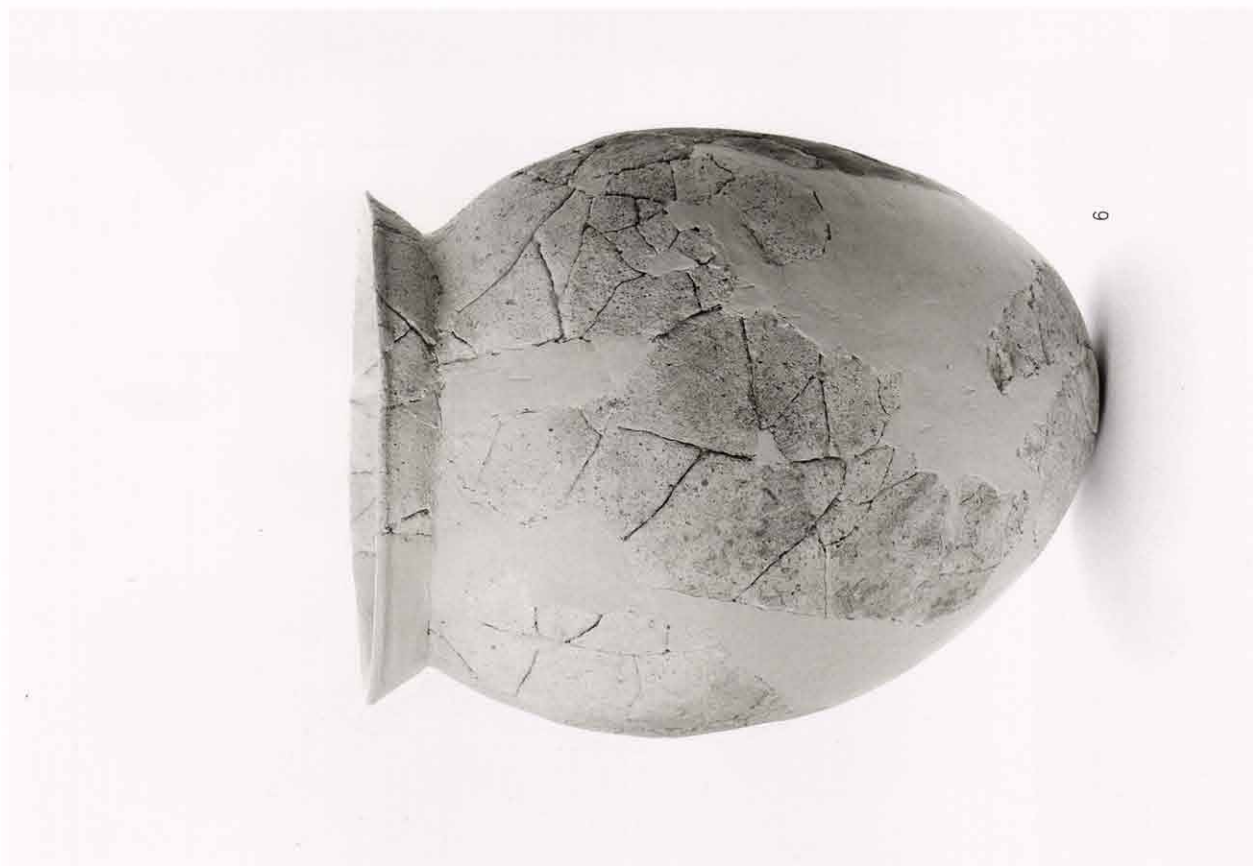


(1)出土遺物1 (番号は実測図番号による)



(2)出土遺物2 1~10包含層出土

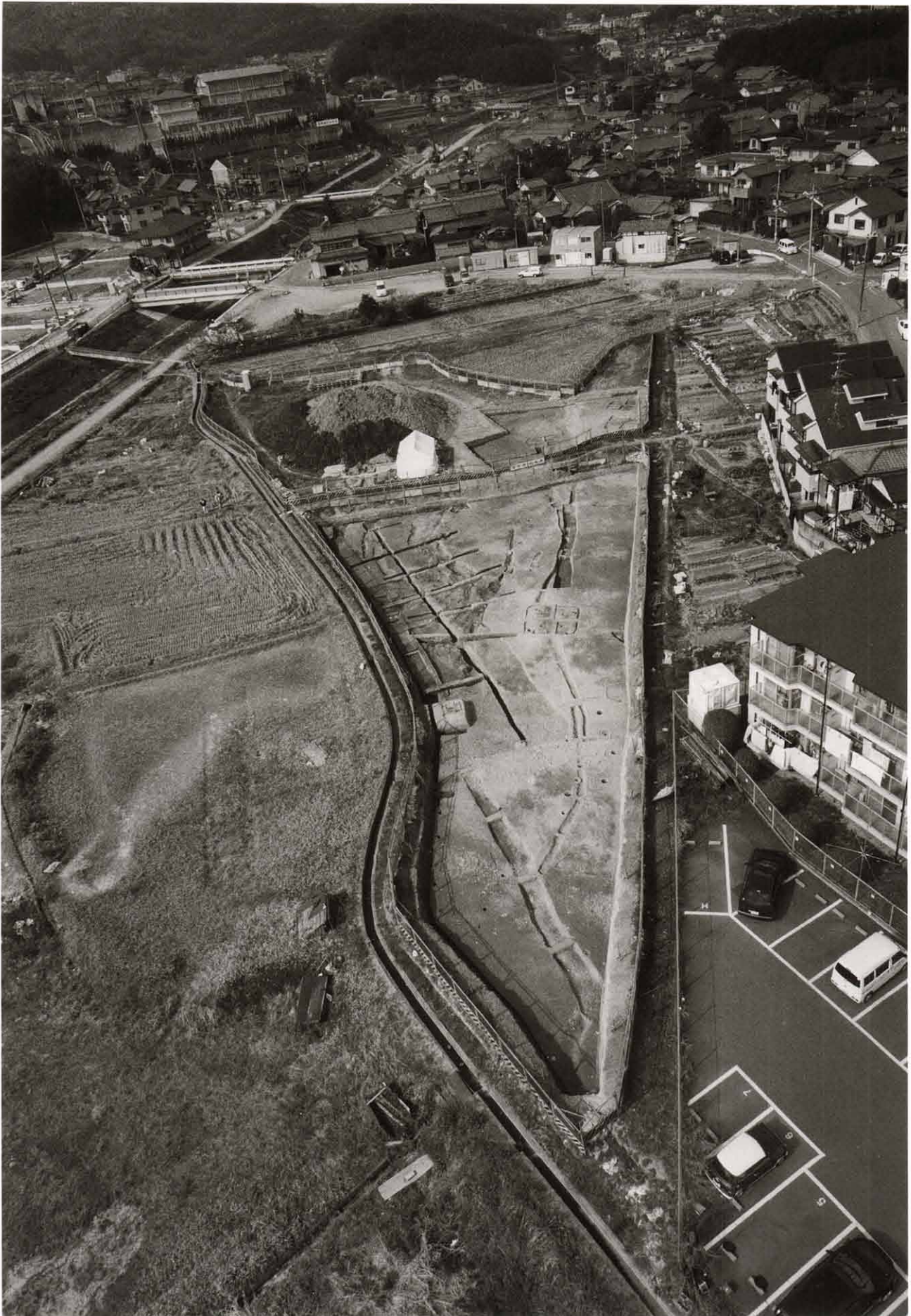
(1.3.5.白磁、2.灰釉、4.青磁、6.瀬戸・美濃、7.須恵器、8.唐津、9.青白磁、10.緑釉)



(2)出土遺物 4 (番号は実測図番号による)



(1)出土遺物 3 (番号は実測図番号による)



調査地全景(東から)



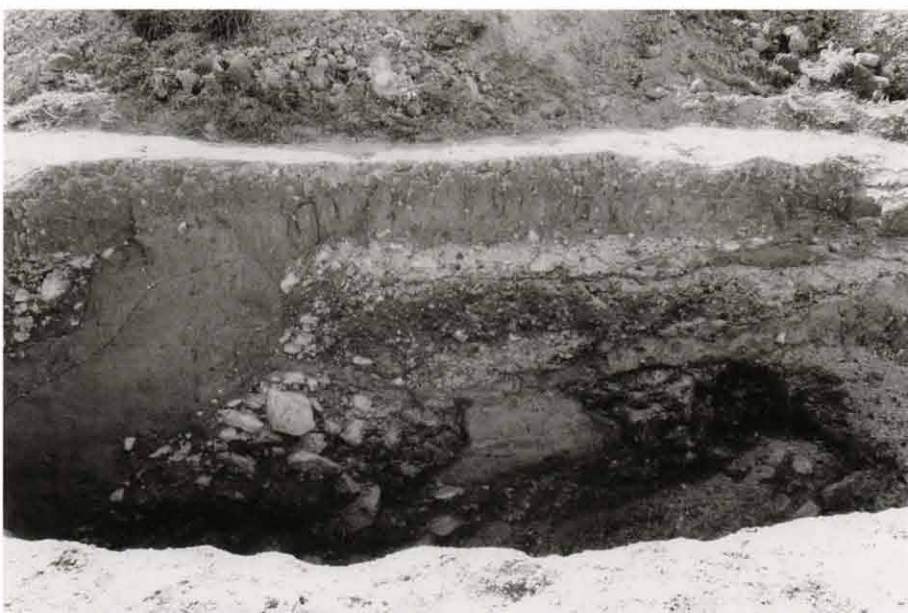
(1) 調査地全景(上が南)



(2) 第2トレンチ全景(上が東)



(1) 試掘トレンチ全景(南西から)



(2) 試掘トレンチ北東壁
(南西から)



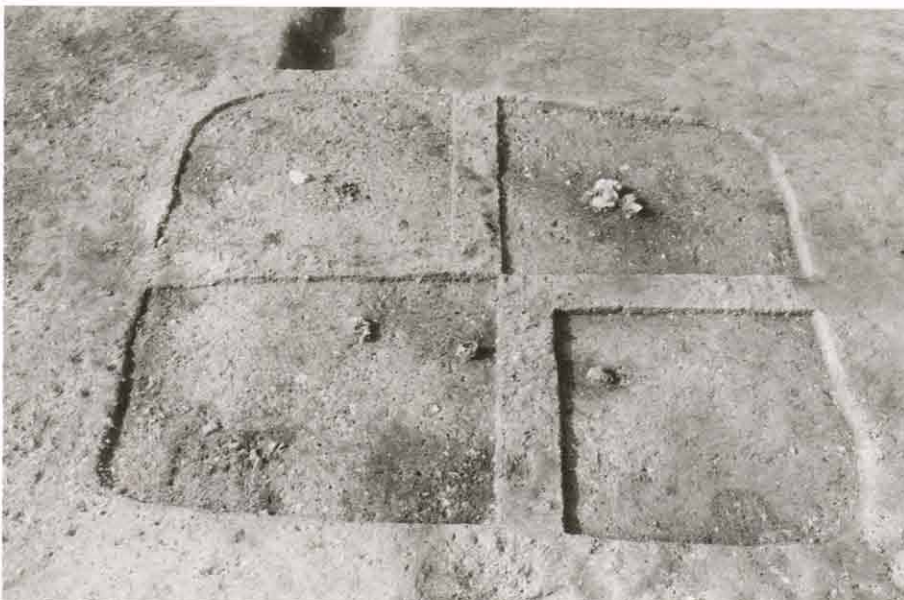
(3) 第1トレンチ東部(西から)



(1) 第1トレンチ南西部
(北東から)



(2) 土坑S K49(南から)



(3) 竪穴式住居跡S H01遺物検出
状況(東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01 (東から)



(2) 井戸 S E57 (東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H01・03
遺物検出状況 (南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01(南から)

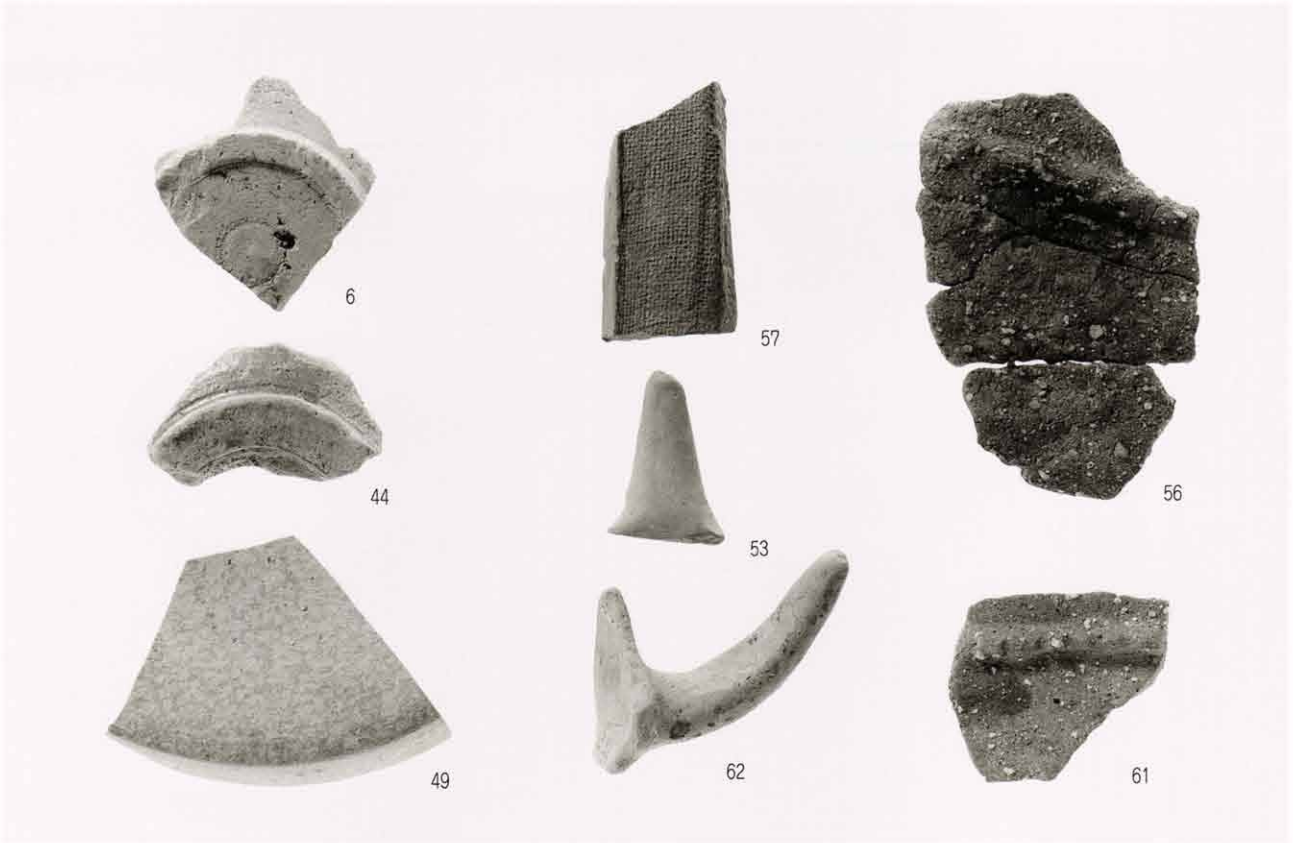


(2) 竪穴式住居跡 S H02
遺物検出状況(西から)

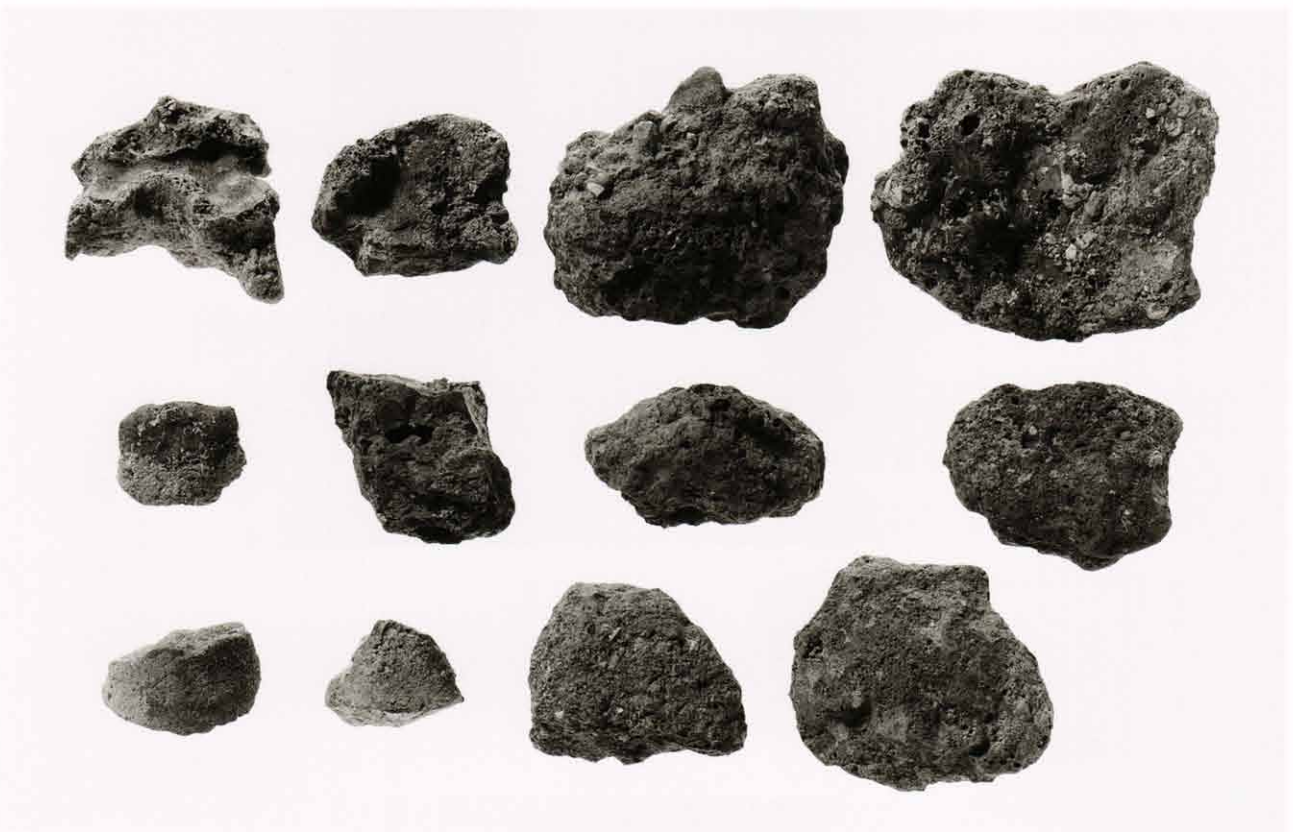


(3) 竪穴式住居跡 S H03
遺物検出状況(南東から)





(1) 上内田地区出土遺物 2



(2) 上内田第1トレンチ出土羽口及び鉄滓